
夜空への贈り物

Dragon-me

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜空への贈り物

【Nコード】

N4856V

【作者名】

Dragon-me

【あらすじ】

私は、星羅の心を殺してしまった。私自身、生きていけなくなる気がして、死のうと思った。

でも……気付いたんだ。私はただ……。

ありがとう、みんな。私は、色々な気持ちをこのアンサンプルに乗せて、星羅に贈ります。

終わり、そして……

「6番、所沢市立大江中学校。銅賞」

ホールに響く、ただ虚しいばかりの拍手。

真っ白になる頭。

それが理解できた時には、すでに次の団体の歓喜の悲鳴が上がっていた。

……夢が断たれた。今年こそ、金賞を持って帰る夢が。

……私の、せいで。

私はこのコンクールが、中学生最後のコンクールだった。去年初めて出た時も銅賞。

そして、銅賞が意味するものは……残念賞。一昨年から全団体に金銀銅のいずれかの賞が与えられるようになったため、銅賞は名誉では無くなっていた。

目からこぼれる、一筋の涙。

夏休みに入ってから、私たちは休みなしにずっと一日練を頑張った。

後輩に思いつきり当たったこともあった。

高校生になった先輩からも、エールと差し入れを頂いたこともあった。

全く音が出なくなった時もあった。それは、前日に何とか克服できた……はずだった。

1stトランペットの私は、課題曲「南風のマーチ」の冒頭のフアンファールの音が全く出ず、そのまま最後まで引きずってしまっ

た。
自由曲「マゼランの未知なる大陸への挑戦」のソロも、最初から音を外し、出てくる音は全てカスカスのヨレヨレで、本当にボロボロだった。

……私が全部、みんなの努力を台無しにした。

もう嫌だ。みんなに合わせる顔がない。

いつの間にか審査結果発表が終わり、「本日のコンクールは全て終了しました」という、役員の女子生徒のアナウンスが流れた。

そのとき、私はある部員の会話が雑踏に紛れながらも、はっきり聞こえた。

「でもさ、星羅せいらが失敗しなければ良かったよね」

「うん。そつだね……」

やっぱり……私……。

ここにすることはできないかもしれない。

うつん、私なんて最初からこの部に入るんじゃないかなかったんだ。

……私なんて……。

電話

星羅が自殺した。

その事を、私は今朝のニュースで知った。焼身自殺だったという。

ふと、昨日のコンクールが終わった後の、友達と交わした会話が蘇った。

「でもさ、星羅が失敗しなければ良かったよね」

……私が殺したんだ。

私が星羅の心を殺したんだ……。

私は今日の最後の部活には、体調不良と嘘をつき行かなかった。

とても行く気にはなれなかった。

「紫音^{しおん}、どうしたの？ 顔色悪いよ？」

「……何でも、ない」

ママにもこう言われる始末。私は気持ちを悟られたくなくて、自分の部屋に入り、こもりつきりになった。

朝の日差しが入る、自動運転のエアコンと扇風機の音だけがする部屋で、私は天井をじっと見た。

星羅……大人しくて、あまり人としやべらない子。でも人一倍の努力をする子。私はそんな星羅に憧れていた。

でも、こんな事もあった。

ある日、私が早く音楽室に来たとき、既に星羅がいて一人泣いていた時があった。私が入ってきた瞬間、星羅はすぐに私の横を抜けてどこかに行ってしまった。

きっと……悩みを溜め込んでいたのかな？だとしたら私、その時聞いてあげられたら……。

なのに昨日はどうしてあんな事言っちゃったんだろう……。

星羅だって、頑張ったのに。

一生懸命、頑張ったのに。

私って、最低だな……。

目から涙が自然に出てくる。私は泣いてはいけないんだ、って思

うけど……こらえられなかった。

逃げているじゃん……逃げちゃダメじゃん……。

でも、そう思えば思うほど、私の静かな涙は増していくばかりだ。
涙を拭う手は、もうびしょびしょだった。

机のケータイが鳴った。

昨日、私と話していた舞^{まい}だ。

私は一呼吸置いて、ケータイを開き通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「もしもし」

いつもの舞じゃない。明らかにテンションが低い。

「紫音……だよね？」

「うん。舞、もしかして今日部活行ってないの？」

私もいつも通りじゃられない。

「うん……」

しばらく続く沈黙。きつと今の私と舞は同じ事を考えている。

星羅の事……

「ねえ……私ってさ、このままでいいのかな……？」

舞が口を開いた。……鼻声になっている。

「うん……」

私も、語尾がかすれる。これが舞につられただけだしたら、私はもっともっと最低だ……。

ここでまた、沈黙。時々、舞のむせぶのが聞こえる。

舞が次に発した言葉は、私の心を大きく揺さぶるものだった。

「じゃあ……紫音はどう思う？……自分の事」

私……？

私は……陰口を叩いて、星羅の……

星羅の自殺の原因を作ったんだ……

舞は悪くない。ただ、私の話に合わせてくれただけ……。

だけど私は……私は……

「っ……私っ……」

「……」

舞はいつも私の悩みなどを真剣に聞いてくれる。

今の、私の結論も。

「私っ……星羅の所に行つて、謝つてこなきゃダメかも……」

すなわち……死ぬ事。

本当は死にたくない。

絶対嫌だ。

だって、舞はもちろん、他の友達や今のクラスメイトと別れたくないし、まだまだ私の未来だってあるんだ。

……でも、私は星羅の心を殺めたんだ。

だから……私もせめて……。

「何言ってるの!？」

返ってきたのは、舞の激。

「少なくとも、星羅はそんな事思っていないって！紫音が……死んで欲しいなんて……」

言葉の前半は……怒った声。必死な声。後半は……悲しい声。

私の嫌いな、舞の声。

「だから……だから。紫音は生きて、人生を楽しんで。それが……星羅の夢だと、思うから……」

「うん………ん？」

私は違和感に気付いた。

紫音“は”生きて……？

まさか……！

「やめてー!!」

私はケータイという事を忘れて大声で叫んでいた。

「……何、急に……」

やや動揺している舞。……でも。

「死ぬの……やめて！やめてよ！！」

嫌だ。私だけ生きて、舞だけ死ぬの？そんなの嫌だ。

絶対に絶対に嫌だ！

「……死ぬのって……人の勝手でしょ……」

舞は本当に死ぬつもりだ。なんで……！？

「私……もし舞が死んだら私も死ぬ。舞がいない世界なんて信じられない！！」

舞を、止めなくちゃ。

私は絶叫した。

嘘

「紫音……」

「私、舞のおかげで生きて罪を償おうと思ったのに……何で自分は……」

舞……嫌だ……怖い……やめて……！

声にならない心の叫びが、目から溢れ出して止まらない。

「何で自分は死ぬとか言うの！？」

ありったけの声で叫んだ。これ以上叫んだことがない位叫んだ。

すると、しばらくの間ケータイからは空気の音しか聞こえなかった。

次に聞こえてきたのは、私の嫌いな舞の、何かに締め付けられているような、苦しそうな鼻声だった。舞の中で唯一嫌いな部分……

「確かに……楽をしようとする私は卑怯かもしれない。でも、私は……生きるのが怖い。後ろ指差されて生きていくのが……」

ケータイの向こうの舞が信じられなくなってきた。

私の……私の知っている舞は……！

「私の知っている舞はそんな弱くない！！」

「本当はこんななの！　私は弱いの！！」

……嘘。

舞じゃない。

私の知っている舞じゃない。

「ごめん、紫音。私……紫音のこと、騙してた」

騙してた……？

嘘だよ。嘘だと言ってよ。

「私……生きていける自信がもう無いの。だから私……今から……」

……でも。

耳からケータイを離し、液晶を見ると、確かに>舞<と出ている。

「嘘だ。こんなの……夢だ……」

「うつん、夢じゃないの。これが……これが本当の私なの……」

言葉が出ない。

叫びたいのに、喉に何かつかかっているような感覚がする。

舞が私の元から離れてく……

「私はもう、ここで終わりにする。紫音……今まで……ありがとう……」

その言葉の後、ものすごい空気の音が5秒位続いて……大きな雑音と舞の小さな悲鳴が聞こえて、接続が切れた。

「舞……！？　　舞！　　どうして！？　　舞……！！」

叫ぶけれど、ケータイから聞こえてくるのは「ツー……ツー……」という音だけ。

私は涙で濡れた手でケータイのボタンを押して、通話を切った。

私の部屋の中は、エアコンの音と、扇風機の音と……自分の静かなおえつの音。

もう、私の好きな声を聞けない。

私の好きな顔を見れない。

私の好きな昨日までの日々は来ない。

私の好きな舞には、もう会えない。

……もう……嫌だ……。

何で……死んだの……？

しばらく、私は無言で涙を流し続けた。その間何を思ったのか、
分からない。ただ、私は泣いていた。

少し経って、私は気づいた。

数分前の、死にたいという感情はどこかに行ってしまったことに。
とに。

それは……舞のおかげなのかもしれない。

……だとするならば。

私は生きる。

星羅の心を殺めた罪を償うために。そして……

私のような思いを他の友達にも、させたくないから。

「……舞……」

私のつぶやいた声は、天に届くことなく、狭い空間の中に消えていった。

連鎖

3年生の最後の部活は、大掃除や後輩への楽器の引き継ぎをして、その後3年生が今までやった曲の中で演奏したいという曲を演奏するというのが恒例の事だった。

去年や一昨年後輩だったわたしも、コンクールの悔しさが吹き飛ば位楽しかった事を覚えている。

しかし、今年は空気が重い。

朝、顧問の先生の口から、星羅の自殺を初めて聞いた。

わたしは信じる事ができなかった。

「先生！　嘘ですよね……！？」

真っ先に叫んだ。

が、返答は隣のアルトサックスの長谷川くんから返ってきた。

「横山先輩……今日のニュースでやってました……。女子中学生が焼身自殺、と……」

「そんな事ない……」

それ以上、誰も何も言わなかった。

みんな静かに泣いた。

でも、わたしは泣けなかった。

だって……信じたくなかったから。

ふと、パー練の教室の時計を見る。既に10時47分を指していた。

「そろそろ時間だから、片付け」

サックスのパートリーダーのわたしは、音楽室への移動を促さなければいけなかった。

普段は「はい！」とか「ラジャアツ！」とか元気な返事が返ってくるけど、今日はみんな、何も言わなかった。

もう、みんな信じてよ……。

まだ星羅は生きてるって……。

「星羅もきつと……この部で良かったと思っています」

帰り道。部長の榎本さんの泣きながらはつきり言った言葉が、頭の中でループされる。

だったら何で自殺するの？

たった中学のコンクールでミスした位で。

大した事ないんだよ？ 長い人生で見ると……。

じゃあ、ここにいてるよね。

まだ、会えるよね。うん。

自分の中で、星羅はまだ生きていると納得させる。

わたしが学校に行く時に、いつも通るマンション。

そのマンションの前に、パトカーが止まっているのを見つけた。敷地内には、野次馬らしき少数の人ばかりができていた。

ここって…… 舞が住んでいるマンションだよ……？

で、なぜか舞は今日部活に来ていない。

嫌な予感がした。

え……？ そんな事……。

あるはず、無いよね。

私は一瞬頭に浮かんだ不吉な事をごまかして、マンションの前を通り過ぎた。

でも……それらは全部、本当だったんだ。

帰ったあと、ニュースで聞いた。星羅は昨日の深夜、星羅の家の近くの公園で焼死体となって発見されたらしい。

舞はあのマンションの屋上から飛び降りた。意識不明の重体だという。

そんな……何で……。

何で……？

わたしは、ただテレビの前で啞然としていた。

生きたい人、死にたい人

舞が飛び降りた翌日。私は病院にお見舞いに来た。他の部員も、不安げな表情でお見舞いに来ていた。

舞は、医療機器に囲まれ、日の当たらない集中治療室にいた。

私も小学生の頃に、ここにおじいちゃんのお見舞いに来た事があるけど、普通の病室とか、廊下とかは太陽の暖かな光が見守ってくれる。

なのに舞は、その光を受けられずに、ただ人間の造り出した命ない機器に囲まれているだけ。

医学的にはそっちの方がいいのかもしれないけれど、私はそんな舞が少し可哀想に思った。

集中治療室に着いた。

ガラス越しに見た舞の姿を見て、衝撃を受けた。

酸素マスクを被り、かなり危険な状態だった。

そして、その横顔は、私にとっては安らかな表情とは言い難かった。

とても悲しく、とても悔しそうに見えた。

握る手に、力が入る。

本当はまだ生きたかったんでしょ？

本当は私たちと一緒に、もっと笑ったり泣いたりしたかったんでしょ？

じゃあ、なんで星羅の為に飛び降りるの？

星羅が望んでもいないのに。

誰も望んでなんかいないのに……！

私はこれ以上舞を見るのが嫌で、集中治療室から早足で離れた。

舞のバカ……！

手の平には爪のあとが残っていた。

家に帰ったあと、一通のメールが届いた。

アルトサックスの美穂^{みほ}からだ。

From：美穂

To：紫音

Sub：無題

突然だけど、今から紫音の家に行っていていい？話したい事があるから……。

あ、別に怒っている訳じゃないからね。

私は少し安堵したと共に、美穂の器の広さを知った。

美穂と星羅は古くからの大親友だ。星羅が自殺した原因を作った私には、普通抑えきれない程の怒りが込み上げらると思う。

今、私の家には誰もいない。ママはパートで、パパは仕事だ。

私は、OKの返事を出した。

……舞。

美穂は怒ってなかったよ。

私、今生きている事がいいのか悪いのか分からないけれど、でも死ななくて良かったと思っている。

私の自殺を止めてくれたのは舞なんだよ。

なのに、なんで……

不意に、ケータイが鳴った。メールだ。

From: 長谷川くん

To: 紫音

Sub: 生きてました！

え……？ 助かったの……！？

私はボタンを押して、本文を読む。

舞先輩の意識が戻りました！！

でも、俺は嬉しいですけど、舞先輩は僕の顔を見た時、なんか複雑な顔になって……

喜んでいいんでしょうか……？

そうなの……？

そんなに舞は、ここが嫌なの……？

私は、星羅だけが舞の自殺未遂の原因だっと思っていた。

でも……なんか、もっと違う原因もあるんじゃないのかな……？

ピンポン、とチャイムが鳴った。

インターホンのカメラを見ると、美穂が映っていた。

変化

「アンサンブルコンテスト、一緒に出よう?」

私は美穂の言葉を疑った。

アンサンブル……? 何で私と……?

私のポカンとした顔を見て察したのか、美穂はこう続けた。

「結果じゃないの。わたしは紫音と出たい。そして、星羅にわたしたちの演奏を届けたい」

私の部屋の窓から差す、西日に照らされた美穂の顔は真剣だ。

だけど私は。

「でも、届けるんだったらアンサンブルじゃなくてもいいんじゃないの? 3月に定期演奏会がまだあるんだし」

私の口は、知らずの内に嘘をついていた。

本当は、星羅が私の事嫌いになっていて、私の演奏なんて聴いてくれないんじゃないのか、って思った。

そんな私の思いを知らない美穂は、こう言った。

「みんなで作り上げる合奏も、確かに星羅には届くと思う。でも、わたしたちだけで作り上げるアンサンブルは、もっと星羅の心に届

きやすいんじゃないかなって思うの」

アンサンブルは、指揮なしで3〜8人の演奏者だけで曲を作り上げる。だから、1人1人の音が……思いがよりはつきりと出る。

そう頭の中で分析すると、他の部員の中途半端な思いに、私の思いを邪魔されたくないと思った。

私の星羅に対する思いを……

ただ、聴いてくれなきゃ、意味が無い。

どうせ……星羅は聴いてくれないだろう。

私が死ぬ事を星羅は望んでいない、って舞は言っていたけれど、そこまで星羅は私を許しているなんて思っていない。

星羅は……私を許していない。

美穂の潤んできた目が私の目を真っ直ぐ捉えた。

「ひょっとして……星羅が怒っているとか思っているの？」

美穂に心中を見透かされた気がして、思わず体がビクツと動いた。

「やっぱり。紫音の事だから、ネガティブに考えてると思ったんだよね」

美穂は一瞬笑った後、すぐ真剣な表情に戻った。

「星羅はそんなに気にかけてないと思うよ。むしろ、紫音が勝手にこう思っている事に怒るんじゃないのかな」

私はハッとした。

今まで私は……

私は星羅を疑っていたのだ。

「だから、すぐその考え方はやめた方がいいよ。……あれ？泣いてるの……？」

「ごめんなさい……」。

星羅……私は……。

「最低な……人だ……」

ぽんぽん、と美穂が私の頭を優しく叩いてくれた。

「ううん。紫音は最低な人間なんかじゃない。こう思っていると本当に最低な人間になっちゃうよ？」

「美穂……！」

私は思いつきり美穂に抱きついて泣いた。

離れると、美穂の服の胸のあたりに、シミができていた。

「ごめん……シミできちゃった」

「ううん。気にしないで」

美穂は優しく笑った。

私は、今の思いを美穂に言った。

「私、もう自分を責めたり、相手を悪く思ったりしない。美穂のおかげで、それは何の意味も無い事なんだって、分かったから」

「……そう！ やっぱり紫音は笑っている顔が一番似合うよ！」

私は照れ笑いをした。

アンサンブルコンテストの件は、一応親と相談して決めると言った。

現実、私は受験生で、普通の成績の私はもっと勉強しなければならない。

ただ、私はこれからママに勉強もすっかりするから、アンサンブルコンテストに出させて下さい、と言いに行くつもりだ。

ありがとう、美穂。ごめんね、星羅。

私は、頑張つてやっていくつもりだから。

あと……舞。

明日行くから、元気でいてね。

しかし、舞が大変な事態になっている事を、その時の私は知らなかった。

再会

「紫音……」

舞は、集中治療室から普通の病室へ移されていた。

奇跡的に一命を取り留めた舞の回復は、医者も驚く程のスピードだった。

しかし……命の代償に、足の自由が奪われた。

下半身不随。舞はこの先一生、自分の足で歩くことが出来なくなってしまう。

その事実を知らされた上で、私が意識を取り戻した舞に会って、まず出た言葉がこれだった。

「何やってんの、バカ……」

死んでなかったのは嬉しい。だけど……。

どうしてこんなバカらしい事したの……。

「……」

舞は、何も言わない。ただ、涙を流すのみ。

私はただ溢れるばかりの思いを、たたみかけるように言う。

「……舞。私、舞がいたから今生きているんだよ。舞が止めてくれたから死ななかったんだよ。なのに何で舞は……」

「やめて」

その声は特別大きな声ではなかった。けれど、舞の声ははつきり聞こえた。

悲痛だった。

「……分かってないクセに」

震えた声。

「うつん、分かってる」

私は強めに言う。

「分かってないクセに！」

舞は声を荒げた。

でも、私には分かってる。

「星羅の事じゃない位、分かってるって」

舞は黙り込んだ。

「ダテに6年間舞の親友やってきたんだから、その位分かるって」

でも舞は、

「……紫音には関係ない」

と、どこか不機嫌な感じで言った。

きつと、舞にとってそれは、私にも知られたくない事……もしかしたら私“だから”知られたくない事だと思う。

「いいよ、言いたい時に言えば」

私がそう言ったきり、お互い無言になってしまった。居づらくなつたので、私はじゃあねと言って病室を後にした。

「うわっ」

「あれ？ 長谷川くんじゃん」

病室を出た時、長谷川くんとばったり出会った。

「あ、こんにちは」

頭を動かすだけの軽いお辞儀をする長谷川くん。

「あれ、一人？」

「はい。……じゃ、会ってきますね」

「あ……バイバイ」

「さようなら」

そう言って、長谷川くんはそそっかしく病室の中に入ってしまった。

顔がほんのり、赤くなっていた。

とりあえず、生きていて私は嬉しいよ。

けれど、舞の複雑な顔を見ると、舞が生きている事に喜んでいいのかわからないよ……。

舞のこと、美穂も悲しんだ。

長谷川くんも、悲しんだ。

喜んでいいのかわからないって事に。

舞、何があるの？

舞の日常に、何があるの……？

再会（後書き）

一章終了です。基本的には紫音、美穂、舞、長谷川を軸として話を進めていきます。

登場人物紹介 & let; 1 & gt; ;

@所沢市立大江中学校吹奏楽部

#山本紫音 やまもと しおん >クラリネット<

3年生の女子。自分の事を過小評価してしまう癖がある。本人も自覚しているが、人を心から信じきれず、ネガティブに物事を考えやすい。元々は明るい性格で、少しおっちょこちょい。混合八重奏のメンバー。

#太田舞 おおた まい >フルート<

3年生の女子。紫音の幼なじみであり、親友。しかし、本当の自分を開放できずにいる。星羅が自殺した翌日マンションから飛び降り、脊髄を損傷する。元は明るい性格だが、紫音とは違いやや慎重である。

#横山美穂 よこやま みほ >アルトサックス<

3年生の女子。星羅とは親友だった。しっかり者で器が広く、優しい。そのためか友人関係が広い。人を信じる事にためらいがない。逃げとも読み取れるポジティブ思考。サックスの元パートリーダー。混合八重奏のメンバー。

#長谷川友樹 はせがわ ともき >アルトサククス<

2年生の数少ない男子部員。男子ではおとなしめな部類に入る。運動神経が良く、特に足が速い。元神奈川県在住。小4の時にある高校の吹奏楽部の演奏会がきっかけで、アルトサククスに強い憧れを持った。一人暮らしの大学2年生の姉がいて、神奈川県大学に通っている。

#村上星羅 むらかみ せいろう >トランペット<

3年生の女子。コンクールでの失態による重責に耐えられず焼身自殺した。

♪混合八重奏メンバー

#久保田陸 くぼた りく >トランペット<

2年生で、新体制で動き出した吹奏楽部の部長。男らしい振る舞いが多く、口調も男だが女子。いつもはユーモアあるキャラだが、やるときはやる。友樹とは親友以上恋人未満。

#嶋千秋 しま ちあき >トロンボーン<

3年生女子。吹奏楽大好きな女子で、ウォークマンには吹奏楽曲が500曲以上入っているという噂がある。ただ音楽を作り上げるとなるとスティックで、更にやや短気でもあるので対立の原因を作

ることもしばしば。

江本充希 えもと みつき > ホルン <

3年生女子。物静かな性格で、人との関わりをあまり持たず読書を好む。ただ、アンサンブルの響きは好きで、チームに残ったのもそのため。小学生の頃から親の影響でホルンを吹き始め、中1と中2の時にソロコンテストで2年連続金賞をもらっている。

中田海花 なかた うみか > チューバ <

3年生の女子。アクティブな性格だが、人に何かを教えるという事が苦手。小学校時代にサッカーをやっていたため、肺活量がすごい。

草野莉央 くさの りお > フルート <

先天的な障害により車椅子で生活する、2年生の女子。内向的な性格だが、少しのきっかけで打ち明ける事ができる。2年生が少ないので、ややいづらそうにしている。

三谷葉 みたに よう > パーカッション <

3年生女子。元気で活動的だが、多少わがままで練習嫌いなのが欠点。腕前はなかなかのもので、テンポキープが非常に上手い。みんなと楽しんで練習したいと思っている。

♪ その他

みやもと
宮本

吹奏楽部顧問の女性。中学ではパーカッション、高校ではチューバ、大学ではテナーサックスを吹いていたという異色な経歴の持ち主。

久々

部活の中でのお盆休みが明けて、久々に来る学校は何故だか懐かしかった。

異常な猛暑の中、汗だくになった額をハンカチで拭いながら、私は学校の階段を昇る。

コンクール前賑やかだった3年生の昇降口も、今ではすのこの音と、2、3人の喋り声だけが響くのみ。

ああ、みんな引退しちゃったんだな……。

私の足音と少しの喋り声しかしなかった廊下も、階が上になるにつれて喧騒を増してくる。後輩達の声だ。

今日から、2年生達が部活の中心となっていく。多分クラリネットの2年生達は……心配ないな。

「おはようございますー！」

「おはよー」

音楽室や部室の方に向かって廊下を歩くと、すれ違った後輩達が笑顔で挨拶してくる。邪魔者じゃなくて良かったな。昔アンサンブルで残っていた先輩達の微妙な気持ちが、良く分かる気がする。

何か……色々な事思い出すな。久々に来ると。

私は荷物を部屋に置いて、いつものように、でもちょっと新鮮な気持ちで楽器を出す。リードを口にくわえながらクラリネットを組み立てていると、後ろから美穂が音を立てないようにしてやってきた。

「わっ」

「知ってるよ。驚かないって」

くわえてたリードを外し、言う。私を驚かそうとしてもそう簡単にはね！

「あちゃ、ダメだったか」

そう言っで、自分の頭を軽く叩く美穂。

「でも、来てくれたんだね。アンサンブル」

「うん。何とか説得させて……ね」

ママの説得はまだ良かったけど、12月位まで部活を引つ張る事になってしまったため、パパの説得は大変だった。1時間位掛かった上、もし落ちたら出家という条件の元やらせてもらえた。

「落ちたら出家って……こりゃ大変だね。なんか悪いな」

苦笑いして、ばつが悪そうに言う美穂。

「だって、星羅と舞のためだから」

美穂のおかげだよ。私がもう一度楽器触れるのも。

「紫音、成長したね」

「うるさいっ！」

いつの間にか美穂はアルトサックスを肩にかけ、たたんだ譜面台などが入ったオレンジの手提げ袋を持っていた。

対する私はまだ、クラリネットの組み立てが終わっていない。

だから美穂は勝ち誇った感情の表情で

「じゃ、先に音楽室行ってるね」

って言うてきた。

「早いよ！こっちは組み立て大変なんだから」

反論するけども、

「でも、何か初め見た時とあんま変わってないよ？」

手元を見ると、ずっと上管へ指を押さえる穴がある部分の半分より上の方々と下管へ同じく下の方々をずっと持っていたままだった。話に夢中で手が進んでいなかった……！

「うつ………！」

「じゃ、お先っ！」

そう言って美穂は行ってしまった。ヤバイ、音出しのためにも早く組み立てないと……。

でも、普通に戻ってるよ、私。コンクール前の美穂と私だよ、さっきの会話。

思えばあれから2週間位経った。きっと時間の流れが、私のショックを癒やしてくれたんだろう。

けど、星羅や舞には悪い気もした。あの時、美穂が言ってくれたけど、やっぱり自分を許す事が出来ないんだ。

私が星羅の立場だったら、間違いなく私が普通でいる事を望むはず。

だけどやっぱり……。

うつん、どんどん悪い方向に考えちゃキリがない。それが私の悪いクセだし……。

私は頭の考えを追っ払って、改めてクラリネットを組み立て始めた。

曲

基礎合奏終了後、アンサンブルコンテストのために残っている3年生は楽器保管庫を兼ねている部屋に集まった。それほど広さは無いけど、7人が集まるには十分過ぎる床面積がある。

集まった3年生は私や美穂も合わせて6人。しかも都合良く全員が別パート。管打楽器6重奏は曲が少ないけれど、これに2年生2人を加えて8重奏になれば増えてくる。

「じゃあ、早速ですけど楽譜配りまーす」

メンバーの再確認をした後、顧問の宮本先生が楽譜を渡してきた。私は、数枚の楽譜から、一番左上に“Clarinet”と書かれてある楽譜だけを取って、隣にいる美穂に渡した。

「夢への冒険……？」

私は思わずタイトルに書かれていた文字をそのまま口に出した。

「そう。嶋さんから私に、この曲やりたいですって申し出があつてね」

嶋さんの顔を見ると、照れたように笑っていた。

3年生のアンサンブルなんて大体こんな感じで決まる。最後だからやりたい曲を自由にやらせてもらえる、というのはありがたいけれど、確か去年の3年生はそれが災いして賞なしだった。

今年はどうなんだろう……？

うつん、私の目的はあくまで星羅のため。もちろん上に行く事も大切だけど。

私はこの曲を星羅にうまくプレゼントできるかな……？

ふと楽譜に目を落とすと、一部に装飾音符つきの細かいパッセー
ジがあるのが読み取れた。

なんかソロっぽいけど……ソロなの？

最初もピアノでゆったりとしたメロディーがあるし……。

うわぁ、テンポは遅くてもフレーズが細かくて歌うの大変そうだな……。

最後の方連符が……。

「……紫音？話終わったよ？」

「えっ？あ、話聞いてなかった」

美穂の声に、私ははっとして我に帰った。楽譜に夢中だったんだ……少し反省。

「全く、紫音ったら……とりあえず、2年生はパート練らしいから、3年生だけで第2音で練習しててっさ」

「ありがと、美穂」

やっぱり美穂は頼りになる。美穂っていつもしっかりしているし、優しいし、何よりも私の事を分かってもらえている。

私も美穂みたいな人間になりたいな、って思ったりもする。本気でなれるって思ったりもする。

頭の中では美穂みたいになれる自分がいるけれど、現実だと全く動けない。そんな時、私は決まってそう思う。

やっぱり昔から決まっているんだ、って。

「……紫音？」

「えっ？」

またしても美穂の声で引き戻された。

「早く楽器取って行こ。どうしちゃったの、最近ばーっとしてる事多いよ？」

美穂みたいになりたい、って思っていたなんて到底言えないから、

「うっん、なんでもない。さ、行こ？」

と、ごまかした。

私は自然を装ったつもりだけど、楽器と譜面台を音楽室から持っていく時ふと後ろを向くと、美穂が複雑そうな顔をしていてうつむいていた。

触れてはならない事

久しぶりの部活が終わったあと、俺は太田先輩のいる病院へ直行した。午前練だったので夕方の暑さよりはマシらしいが、やはり道中暑さで今にもぶっ倒れそうだったのは午後練と同じだ。

俺はまだ、あんなにも明るくて可愛い太田先輩がなぜ突然飛び降りたのか分らない。村上先輩の自殺の一日後に飛び降りた、というのには多少引かかっている。もしかしてそれに後押しされたのだろうか？

それにしても、心によほどの傷がないと自殺なんてそうそうしないのではないだろうか。村上先輩も、コンクールでの演奏が散々で、その責任というものに耐えきれずに自殺したのだと想像できる。ただ、コンクール翌日に村上先輩を演奏で責めた人なんて、どこにもいなかったけど。

しかし太田先輩は？ 少なくとも部活中には太田先輩が一人になるという現象は起きていない。俺は太田先輩の闇が全く分からなかった。

いつしか病院に着いた。弱冷房が火照った体を冷やし、額の汗がさらに増える。天国だと思うのもつかの間、温度差に慣れてしまえばここも暑く感じる。

太田先輩の笑った顔。俺はその顔が一番好き。

お盆休みの間も俺はお見舞いにちよくちよく来ていたが、その時太田先輩が笑う事はなかった。

今日こそ、笑ってくれるかな。

最初来た時はその白さに若干興奮したものの、今では逆にそれがうつとうしく思える廊下を歩き、太田先輩の病室の前に着くと、俺は先輩と看護婦であろう方との会話を聞いてしまった。

「……ご両親が、無理心中で他界されました」

「……はい。それで？」

「あなたには引き取り先がおられないので、病院側と児童養護施設の方と相談した結果、退院後児童養護施設の方に預けられる事になりました」

「はい。伝えていただきありがとうございました」

……今、耳に届いた事柄は本当なんだろうか。

俺は信じられない。会話の内容もそうだが、それを淡々と受け入れる太田先輩も信じられなかった。

病室を間違えたのか？とも思ったが、右上の名札を見ると、確かに“太田 舞”の文字しかなかった。

不意に横開きのドアがガラガラと開き、先ほど太田先輩と話していたであろう看護婦が出てきた。看護婦は、ドアの側にいた俺の顔を見るなり、嫌な顔をした。

俺は何があるのか知りたい。好きな人の裏を知って、何か力にな

りたい。

俺は覚悟を決めて病室に入った。

絶対に両親の事を訊き出す、と。

「太田先輩！」

俺は開けたドアを力に任せて勢いよく閉めた。ビシャン、という音の余韻が病室に、廊下に響く。

「長谷川くん……？」

太田先輩はベッドを起こしていて、俺を見て少し驚いている。

「もしかして……聞いていた？」

「はい」

いつものような、顔が熱くなるような事はない。その代わり、訊き出さなければならぬ、という良く分からない使命が頭の中を覆い尽くしていた。

「先輩、両親との間に何かあったんですか？」

単刀直入。とっさにはこのセリフしか思いつかなかったのだ。

「ううん、これは私だけの問題。ごめんね、来てくれて嬉しいけども、今は少し一人でいたいから……」

この言葉に反して、太田先輩の表情はまさに無表情、といった感じだった。

俺は更に突き詰めて訊く。

「じゃあ、何で先輩は悲しそうじゃないんですか？」

すると、先輩は一瞬だけはっとした表情になったが、すぐに怒った表情になって、

「いいから早く出てって!!」

と強い口調で言った。

……これ以上訊いて何になる？ただ先輩が怒って、俺の事を嫌いになるだけじゃないのか。

「……ごめんなさい。じゃあ、さよなら」

俺は頭に何か引っかかる所を残しつつも、太田先輩に背を向け、病室を静かに後にした。挨拶は、返って来なかった。

「あーあ、怒らせちった……」

落ち着けない程の真っ白な廊下を、俺はゆっくり歩いた。

先輩と両親の間に何かある事は分かった。が、先輩を怒らせてまでそれは訊くべき事だったのか？

それよりも、この先先輩とはどうなる？

俺は、わざと自分に聞こえるように溜め息を一つついた。

怒り

家に帰り、余った時間を趣味の作曲に費やし、夕飯も食って自分の部屋にこもる。わざと今日は電気は点けてない。窓からわずかばかりの街灯や、車のライトの光も入って来るので真っ暗という訳じゃないが。

ただ、余計なもんが消えれば考え事に集中できるって事だ。

さてと、どうすっかな……。明日何とかして先輩と仲直りしないと。

だけど、もうあの事は潔く諦めないと。人が嫌がつてんのに無理やり聞き出すメリットなんてない。話したい時になれば向こうから話してくる。

ああ、俺ったらバカだ。衝動に弱いんだよなー……。

さておき、仲直りするにはどうすりゃいいんだ？ ……って簡単か。

昨日はごめんなさい、って言えばいいか。許される時は許される。逆の結果になつたら痛いけど。

それに、俺は真っ直ぐにしか物を言えない。変に飾ったら、めっちゃくちや不自然になつて逆効果だろうな。

こんなもんかな。また先輩と普通に話したいし。

……笑う顔が見たいし。

はあ……原因は誰なんだよ。

窓を開け夜空を見る。車が通る音が大きくなり、耳障りだ。よく晴れていて、夏の大三角形がよく見える。逆を言つとそれ位しか見えないんだが。

太田先輩がこうなった原因となったのは……今じゃこの世にいない先輩。

村上先輩。なんで死んだんだよ。太田先輩をこんなにして、許さねえから。

俺は頭の中で言った。ただ、生前の村上先輩が嫌いかと言われると、答えはN o だ。

俺ら後輩にとって、ただひたすら努力していた先輩の姿はまさに模範だった。

けれども、自分が苦しいからという理由で、共に歩いて来て、これからも歩んでく予定だった親友を見捨てて行けるのかよ。

あ、もう私無理だわ。じゃ、あと一人で頑張つて！。的な感じだろうが。

そんなつもりなくてもよ、村上先輩の自殺で、親友の太田先輩が苦しんでんだよ。

それに。先輩の失態は誰一人も責めてなかった。

村上先輩、生きていれば良かったじゃねえかよ。親友を傷つけま
で死ぬ意味がどこにあるんだよ！！

俺は、窓を閉め、紺色の遮光カーテンを閉めた。

夢

自分の体に真上から吹き付ける、とても強い風。

通常なら空が見えるはずの真上を見ると、地面が猛スピードで近づいてきている。

今、私は地面に向かって落ちているんだ。

やだ。私死にたくない！！ 助けて……！！

「……夢、か」

目を覚ますと、既に日の光が差し込んでいた。

あの時の夢。

コンクールの翌日、私はマンションの屋上から飛び降りた。

体が自由落下を始めた時、とても怖かった。でも、数秒後に地面にぶつかるのと楽になれる、って思って自分を励ました。

しかし、本当に地面にぶつかった時、とても痛かった。次第に遠のいていく意識の中、痛みが消え失せる事はなかった。

あんな高い所から飛び降りながらも、私は生きていた。ただ、そ

の時お見舞いに来てくれた友達の顔を見て、私は嫌な顔をしてしまった。

私は死にたかったのだ。

「あんな高い所から飛び降りて、足が動かなくなる程度で済むなんて奇跡だよ。もう二度とこんな無茶な事するなよ」

医師からそう言われた時は、私は奇跡を恨んだ。奇跡を恨んだ事って、初めてだった。

それに、脊髄を損傷し足が動かなくなった事によって、自力で飛び降りる事が出来なくなってしまった。なぜ、よりによって足が動かなくなってしまったのだろうか。神さまが私をこの世に縛りつけるためにこうしたならば、その時の私は余計なお世話だって言いたかった。

でも、紫音がお見舞いに来た時に、思いが変わった。

「ダテに6年間舞の親友やってきてるんだもん、その位分かるって」

私は“傷つく事を言ってしまった後に星羅が自殺した事による、精神へのダメージ”という理由を表に出そうって思っていた。

でもそんな嘘、紫音にはバレバレだったみたい。

それだけじゃない。お見舞いに来た他のみんなは私の無事を喜んだけど、紫音だけは怒ってた。ただ単なる同情とか、個人的な損得とか、流れに乗っかってる訳じゃないんだ。

私はこんな良い親友を持っていたんだって気づいた。そして、私は紫音のために、最後の最後まで生きてみせようって思った。

でも、あれ以来紫音はお見舞いに来ていない。そりゃそうだよな、私、紫音の事ずっと騙してた。自分の弱い所をひた隠しにしてて。

それと対照的に、長谷川くんはほぼ毎日って言っていっぱいお見舞いに来ている。

長谷川くんが私の事を好きなんだって事、私はとつくの昔に知っている。私の前に来た時の長谷川くんの顔少し赤いし、実際に長谷川くんが女子の恋バナに巻き込まれた所に偶然遭遇して、好きな人誰？ という質問に、恥ずかしそうに私の名前を挙げていた。

でも、今まで一回も告白してきてない。私としても、今の段階で付き合えるのかどうか、というのは微妙だ。

そんな長谷川くんは、昨日、両親の事を聞かれたから、強く言うてしまった。

本人に悪気はないのは分かってる。けれど、私の中の何かが受け付けなかったのだ。

大丈夫なんだろうか。元氣なくなっただけなら良いけど……。

一番

相変わらずの、容赦のない照りつけ。朝位は涼しくなってくれ、と毎日思っ愚痴を頭の中で吐き捨てて、今日もまた部活に行く。

今日はアンサンプルではなく、9月終わりにある文化祭でやる曲の練習だ。そのため、横山先輩などの3年生は来ない。

「よ、友樹^{ともき}」

バイパスの信号待ちの時、チチチという自転車の音と共に陸^{りく}が声を掛けてきた。白いヘルメットの陰になっている額からは、汗が噴出していた。

「よっ」

俺は挨拶代わりに手の平を軽く挙げ、陸に見せる。

陸は、昨日から部長になった生真面目な奴で、その性格ゆえかトランペットも天才的に上手い。ほとんど3年生で構成されている、アンサンプルの管打チームにも入っている。

ただ、休憩となると途端に面白くなる奴なんだ、コイツが。

「あちいな、毎日毎日。もう二酸化炭素吹っ飛んじゃえよ」

こういつ事を言うようになる。

学校へ向かいながら、面白いユーチューブの動画について語り合

ったり、昨日のアンサンブル練習の様子とかを言い合ったりした後、唐突に向こうから爆弾が飛んできた。

「ところでさ、太田先輩とはどうよ？」

「ちょ……」

心臓が暴走し始める。顔の内側からも日光が当たっているように温度が上がる。余計な汗が噴き出て、しきりに腕で拭く。

「なんでそうなるんだよ……」

いつもいつも、コイツは突然に太田先輩の事を聞く。その度、いつも俺はあの感覚に支配されるのだ。

いつもは俺をからかって言ってきた。

ただ、今日みたいな例外もある。それは、俺を気遣ってくれている時。

「だってさ、最近元気なくね？」

「そっか……？」

「ほら、今も眠そうじゃん」

「マジで？」

その直後、俺は大きなあくびを一つしてしまった。

「思いっきりじゃねえか」

陸は俺を見て破顔した。

「なんだよ、人間なんだから仕方ねえじゃん」

でも、昨日は確かに良く眠れなかった。夏特有の微妙な蒸し暑さなのか、それとも……。

「でもな、無理はすんなよ。理由が何であれ体調崩したらどうにもならないから。ま、先輩の事だらうけどさ」

陸は前を向いたまま、サラツと言った。

……お見通しされたな。

「サンキユ。お前こそ無理すんなよ、部長さん」

ちょっと悔しかったからこう言ってやると、陸はフツと鼻で笑って、

「分かってるよ」

と、握った右手の親指を突き立てた。

ここに来た時に、一番に友達となった陸。不安だらけの俺に、向こうから声を掛けて来てくれた時から、今に至る。

たまにこう思う時がある。

コイツがここにいて良かった、なんて。

ま、本人の前では絶対言えないけどな。

不安

今日の練習は散々だった。眠さと余計な思考が曲への集中を邪魔し、合奏の時に恥をさらした。

やはり、陸の言う通り俺は疲れているのだろうか。

そして今、俺は病院の廊下を歩いている。不安が渦巻く。

太田先輩は許してくれるだろうか。

太田先輩は笑ってくれるだろうか。

許してくれなかったら諦めよう、って決めたにもかかわらず俺はどこかで怯えていた。

やはり、いざ関係を断つとなると怖い。

そんな事に気をとられている内に、俺は病室の前に着いた。

この扉を開けると、太田先輩がいる。果たして俺がこのドアを開けた時、先輩はどんな顔をするのだろうか。

……何かしないと何も起こらない。

俺は汗ばむ手でドアを横に開けた。太田先輩は、上半身を起こしこちらを向くと一瞬驚いた顔になったが、すぐに普段の顔に戻った。

「失礼します、こんにちは」

「こんにちは、長谷川くん」

俺は太田先輩のベッドの側に寄る。決心はとうに付いている。

「昨日は、突っ込んだ事を訊いてしまい、ごめんなさい」

俺は、この世の全ての時間が止まったと錯覚した。

太田先輩の顔は、変わらない。何とも言えない空気が流れている。

たった2、3秒の事だ。けれど、長すぎる2、3秒だった。

太田先輩の口が、緊張の空気を打ち破った。

「ありがとう。私こそごめんね」

先輩はかすかに笑った。えくぼが出来たのを見ると、鼓動の早さが少し増した。

「昨日、突然だったから少し混乱しちゃって……」

「いえ、俺が先輩の気持ち考えてなかったのが悪いんです」

「うっん、怒鳴っちゃった私も悪いから。お互い様だね」

俺は「はい」とうなずいた。先輩の笑顔につられて、俺も口元が上がるのが分かった。

しかし、先輩の笑顔はすぐに真剣なものに変わった。

その後、太田先輩はこう言った。

「それでね、急なんだけど、私の両親の事長谷川くんに話そうと思う」

顔はいつもの無表情。でも、本当は結構驚いていた。

なぜ……？

両親

「今から話す事、他の人には絶対黙ってて。例え先生でも」

私がそう言うと、長谷川くんは無言でうなずいた。

今日の午前、私は長谷川くんはこの事を話すと決意した。理由は、毎日来てくっていて、かつ紫音や美穂ほど親しくない長谷川くんなら、私の過去を話せそうだと思った。

本当なら親しいからこそ話すべきなんだろうけど、やっぱり紫音や美穂に話すのは私には無理。悲しい思いをさせたくないから……。

私は、両親の全てを話し始めた。

「私は、昔の両親はとても好きだった。共働きで一人でのいる事が多かったけど、その分休みの日にはたくさん可愛がってもらえたんだ」

小さい時の事がいくつか思い出された。楽しかったな、本当に。あの事件が起これなければ、私はきっと今でも普通の生活を送れていたんだろうな……。

「でも……ちょうど1年前位の事かな。お母さんの方の実家に住んでいる家族が皆殺しにされた。偶然なのか、翌日にお父さんの方の実家でもその事が起こった」

長谷川くんは、驚いた顔をした。

「もしかしてあの事件ですか……!？」

「そう。今日テレビでやっていたよね、ちょうど一年って……」

未だこの事件の真犯人は捕まっていない。

それもそのはずだもん。だって……。

「それから、両親はよくケンカをするようになった。殴り合いは日常茶飯事。私にもそのとばっちりが来て……というかいつしか私への暴力が中心になっていったんだ。それも、顔とかじゃなくてお腹とか、肌が外に見えない所を中心的にね」

その上、林間学校や修学旅行にも行かせず、プールにも入れさせないという徹底ぶり。おかげで、紫音や美穂も含め誰一人虐待には気付かなかった。

長谷川くんは、何もものを言えないような状態だった。相当なショックを与えてしまったようだ。

心配になった私は聞いてみる。

「……どうする？ やめる？」

「いいです。全部聞きます」

でも、長谷川くんは真剣な顔でいる。強い決意がにじみ出ていた。私の全てを受け止めてやる。そう言っているような気がした。

私が初めて、彼にキュンと来た瞬間だった。

「じゃ、続き」

その気持ちを悟られないように、私は冷静になる。そして、私はさっきの続きを話す。

「私はこれで死にたかったの。もう、痛い思いはしたくないし、それに……みにくい争い事をする両親をもう、見たくなかった。私が飛び降りた事で、両親はきっと正気を取り戻したんだと思う。いや、正気じゃないけどね。それで、お互い悪かったねって無理心中したんじゃないのかな……」

「そういう事なんですか……」

私の真の自殺の原因を知った長谷川くんは、少しうつむいた。

「両親をあんなにした、あの事件の犯人、早く捕まって欲しいですね」

「ううん。捕まるはず、ない。だって……」

私だけが知っている、あの事件の真犯人。所詮は中学生の情報なんだ、警察は全く当てにしてくれなかった。

私は真犯人を長谷川くんに告げた。

優しさ

「それ、本当ですか……？」

長谷川くんは驚きの色を隠せない。

「そうなの。何をきっかけにして、こういう行動に出たのかは全く知らないけれど」

行動の裏には、必ず原因があるはず。きっと何かがあったんだろう。いら立たせる何かが。

きっとお父さんやお母さん、そして私も殺したかったのだろう。でも、それがなぜかできなかった。何か、特別なものが2人にはあったんだ。

それが私だった、と気づいたのは今日の事だった。

「でも、2人ともあの世で反省してくれればいいよ。それで、元の2人に戻って、私が死んだ時に、昔の2人に戻って迎えてくれれば」

かすかに声が震えた。それに自分が気づいた時には、視界がぼやけていた。

「……先輩」

長谷川くんの、強い顔。私の過去を一切目を背けずに聞いてくれ

た。

そして、一言。

「先輩って……優しいんですね」

それは、いつものおどおどしさも何もない、ただ純粋な気持ちの
ように聞こえた。

「……ありがとう」

私はすでに、泣いていた。

長谷川くんは更に言葉を続ける。

「でも、あまり一人で抱え込まないようにして下さいね。みんな、
先輩の味方ですから。その……俺も……」

「味方なんですよ？」

無理に笑ってはいない。ただ、泣いてはいる。いつものたどたど
しさが可愛く思えてきた。けど、素直な私を思いやる気持ちはかっ
こよく思えた。

「分かってるって。だって毎日来てくれてるんだもの……」

「先輩……」

長谷川くんの顔が、桜色にほのかに染まった。かっこいいけど、
やっぱり可愛い方が勝つかな。

「長谷川くんも頑張って。私も、長谷川くんの味方だから」

私は少し笑った。頬に伝っていた涙は、乾き始めていた。

長谷川くんはうつむいて、

「ありがとうございます」

って言った。

いつもの長谷川くんだ。思わず抱きしめたい、って思ったりもしたけど、さすがにそれやると長谷川くんぶっ倒れそうだし……。

でも、何か分からないけど、彼の体温を感じたかった。

「はい」

私は、衝動的に右手を長谷川くんの前に出していた。

「えっ……？」

顔を上げ、戸惑う長谷川くん。少し赤かった顔は、いつしかリンゴのように真っ赤になっていた。

「お互い頑張ろ、って事で握手しよ？」

本当は、私のわがままだけだね。

長谷川くんは、小さい子供のようにこくりとうなずいて、私の手

をゆっくり、優しく握った。

彼の手は私の手を包み込むようで、暖かった。でも緊張しているのか、わずかに震えていた。

長谷川くんはずっとうつむいていた。少し上下に揺すった後、長谷川くんはパツと握っていた手を離してポケットに隠した。

すっごい分かりやすいって。思わず、笑みがこぼれた。

優しさ（後書き）

これにて、二章完結です。

病室

カーテンから漏れる朝日の光で、私は目を覚ます。

ただ真っ白いだけの天井。何日間私はこれを見続けてきたのだろうか。つい最近から車椅子に慣れるためのリハビリが始まっているけれど、それでも1日の大体はここで過ごしている。

そういえば、紫音が今日から新学期だって言ってたな。

紫音とは、長谷川くんに私が両親の事を話した翌日に仲直りした。私は、長谷川くんのお陰で謝る勇気が湧いてきたんだ。ごめんなさいメールを送ると、“明日来るからその時話そう”と返ってきた。それで、仲直りできたんだ。

そして、私は紫音にも両親の事を話した。

私は騙し続けるのが紫音のためだって思っていた。でも、それだと自分が思った事を素直に言えなくなっちゃうんだ。

それに気づいた私は、つらかったけど紫音を信じて全てを話したんだ。

紫音は、私にこう言ってくれた。

「つらくても、私が付いているから。絶対に逃げ出さないでね」

その時、私は本当の紫音の親友になった。

もしかすると、私は紫音のためになるから騙したんじゃないかって、自分にとって都合のいいように騙したんじゃないのかな。

そういう時、自分の罪悪感をなくすために、自分で紫音のためとか言って自分を騙してたんだ。

自分って、本当にバカだったんだな。

でも、今は違う。紫音に対して、素直にものが言える私がいる。

あれから、もう5日くらい経ったんだな。紫音たち、きっと今学校に行っている最中なんだろうな。

私かというと、やはり受験生は受験生だから、これから勉強するつもり。普通に公立行きたいし、近くの進学校に入学するために一杯勉強するんだ。ハンデを背負っちゃった私だから、相当頑張らないと受からないし……。

私は、折り畳み式の机を広げ、勉強道具を準備した。朝食まで時間あるしね。

でも……ずっと一人か。やっぱり寂しいな……。適度に騒がしい学校の授業が恋しい。

私はいつも使っている白と水色のシャーペンを持って、テキストを開いた。

「あつ……」

書き出そうとした瞬間に、シャープペンの芯が折れてしまった。

何となく、嫌な事が起こりそうな気がした。

温度差

火で加熱した直後の試験管を、流水で洗うと試験管は割れて飛び散る。小学生の時に、ある男子がこのミスをやらかしてしまった。記憶の片隅に、確かに強く残っている記憶だ。

それは人間関係においても同じである事を、今日知った。

「もう、勝手にして」

ボタン、と乱暴に閉められる第2音のドア。彼女の座っていた席には、もう何も残っていない。

新学期が始まって最初の放課後練習の事だ。トロンボーンの嶋さんが怒って帰ってしまった。嶋さんは音楽にシビアな性格で、過去にもパート練習の時に分裂を引き起こしてしまった事もある。

「さてと、トーク続けよう？ 邪魔がなくなっただし」

嶋さんを怒らせる原因となったのは、パーカッションの三谷さん。練習中に関係ない事を言うから、嶋さんを怒らせてしまったのだ。

美穂は、無言で個人練を始めた。それを聞いて、私もクラリネットのフレーズを練習し始めた。2年生の、フルートの草野さん、トランペットの久保田さんも吹き始める。

言い換えるならば、私達は集団で無視をした、という事になるのだろう。

「ちょっと、練習するなら外でやってよ」

三谷さんが黙っていられるはずがない。その一言で元々重苦しかった空気は更に凍てつき、4人の音が止まった。

嫌気がさした。いくらなんでも自分勝手すぎる。

私は立ち上がって三谷さんの方向を向いた。椅子が反動で後ろにこすれる。

「いい加減にしてよ！ 私達は何のために残っていると思うの?!」

しかし、三谷さんは動じなかった。

「嶋さんは、勝手にしてって言ったじゃん。だから私は勝手にしているだけ。私が邪魔なら、帰るよ」

そして、三谷さんは自分の荷物を持って、第2音を出ていった。

勢いよくドアの閉まる音が響いたあと、何とも言えない静寂と空気が流れた。

しばらくして、静寂を打ち破ったのは美穂だった。

「……練習、再開しよ?」

美穂は、メトロノームを動かし、楽器を構えて座った。

「じゃあ、とりあえず続きから」

しかし、さっきの出来事が強烈に頭に残っている今、練習に集中しろなんてきつと無理な話なんだろう。

結局この日は、音がバラけて練習という練習にならずに終わってしまった。

重苦しい空気も、終了まで消える事はなかった。

不信

帰り道。まだ暑さは残るけど、日はもう低い位置にある。でもセミはまだ鳴いているから、もう秋なんだな、とは思えないけど。

今は紫音と一緒に並んで帰っているところだ。放課後の件で、やっぱり表情が浮いていない。きっとわたしも、意識せずにそういう表情になっているんだろうな。

わたしがそんなじゃ、ダメなんだけども。紫音が浮かない表情していると、やっぱり心配になって、つい……ね。

「もしかして、今日の事気になっているの？」

「うん。私、どうすればいいのになって……」

ややうつむき気味だった紫音は、わたしの方を向いて言ってきた。

紫音は自分が積極的に動く事によって、この事件を解決しようとしている。でも、今の所は……

「今の所は、様子を見た方がいいと思うよ」

「何で？」

「あれだよ。2人とも衝動的にそうなった感じだったじゃん？だから、まだわたし達が関わるのは早いのかなって」

「でも……」

紫音はやっぱり気になって仕方がない、というような感じだ。やっぱりネガティブに考えてしまうクセはまだ直らないね。

だからわたしは、紫音にこう言った。

「平気だよ。むしろわたし達が下手に関わると、もっと悪化すると思うんだ。2人ならきつと戻ってくるよ」

「うん……」

だけど、まだ紫音は考えている。なんでだろう。他の人の優しさとか、そういうのを紫音はまだ信じきれてない。

「紫音、2人を信じて」

「あ……うん。そうだよね、信じてみないとね」

その微笑みは、少し作ったような感じがした。

気がつくともう、分かれ道だった。

「紫音、また明日ね」

「うん、またね」

わたしは、紫音の背中が小さくなっていくのを少し見てから、自分の家の方へ歩き出した。

一人になった途端小さく聞こえた、紫音の独り言を頭の中で繰り返す。

返しながら。

“ やっぱり私、みんなの優しさとか、強さとかを信じきれないんだね……”

クラス

昔から紫音はこんなだったと思う。みんなを気づかえる優しい子だった。でも、その度合いが過ぎてしまっているんだ。

“人の優しさを信じる事ができない”

紫音がそれに気づいたのは、ごく最近の事。

正直、わたしにできるのはアドバイス位。紫音なら、克服できるよね。

きつと……

――――

翌日、体育祭の大縄に備えての、クラスでの朝練のために早く来た。早く来た、とは言っても部活の朝練と同じ時間だけ。

教室には多くの女子と少しの男子がいた。男子は主におとなしい子がいる。元気なのは、大抵後の方に来る。

でも、全体的に雰囲気重い。星羅と舞の件が影響しているのだろうか。

始業式の日。わたしの前の机に、花が置かれていた。急に色々思い出してきて、人知れず泣いてしまった。

そしてホームルームの時、2人の事がクラスに知らされた。あれ以降、クラスの雰囲気は重々しくなってしまった。

知らさないとはいけなかった事。でも、あまりにも……。

「大縄行こう」

縄を持った体育委員の女子が声を掛ける。返事の声は聞こえず、みんなは何かに取りつかれているように後ろについていった。

これが、今のクラスの状態。夏休み中に、突然1人がいなくなったクラスの……。

ここには、星羅の事責めるような人、誰もいないよ？　あと舞も……。

星羅も舞も、紫音と同じように人の暖かさを信じきれてなかったんだ……。それが、こんな結果を招く事になったんだ。

その事に、今気づいた。

みんな本当は優しいんだ。自分をみんなに開放すれば、みんなもそれに応えてくれる。それで自然に分かってくるんだ、みんなの性格が。みんなの個性が。

みんなの優しさが。

星羅は、クラスの中でも割と静かで、みんなと話す所を見た事が少ない。部活でも同じだった。

だから、みんなの優しさを知らないまま……。

わたしは、誰もいなくなりしんとした薄暗い教室で、一輪の花が寂しそうに咲く星羅の机に行き、手を合わせた。

そして、教室を後にして校庭に向かった。何も会話をせず、ただ跳び続けるだけの練習に参加するために……。

みんな。どうして笑わないの？

いつものみんなはどこに行っちゃったの？

みんながこんなに暗いと、星羅はきつと……。

包容

放課後。まだ蒸し暑さが残る中、わたしはゴムがはがれかけた階段を１段１段ゆっくりと上っていた。

今日は１？２年生が文化祭の曲の練習をするため、３年生は自由参加の自主練となっている。紫音は参加しないようで、もう家帰っている。

きつと紫音は勉強しているんだろうな。だって落ちたら出家って大変だし……。

でも、これが中学最後のアンサンブルコンテストであって、中学最後の舞台。わたしは後悔したくない。だから、練習するんだ。少しでもみんなの足を引っ張らないように……。

３階と４階とを結ぶ階段を上る時、トロンボーンがロングトーンをする音がかすかに聞こえてきた。部室からだろうか。

その音は１段１段階段を上るにつれ、次第に大きく、そして暖かくなっていく。

この部室の外にも響き渡る、まるで世界を包み込むような優しい音色は間違いなく……。

わたしは廊下のホワイトボードに書かれている予定を一瞥して、部室のドアノブを回した。

途端に、廊下を包んでいた音がふと消えた。

「…………美穂？」

譜面台の前の1人の女子が、構えていたトロンボーンを下ろしこちらを見る。

嶋千秋。しま ちあき あだ名は“ちー”。わたしの友達の1人。

「ちーじゃん。こんにちは」

そう、わたしは普段通りを装って自分が使っているアルトサックスのケースを出す。

予想はついていたけれど、内心、とても驚いたし、嬉しかった。

「こんにちは。…………美穂、昨日はごめん」

ちーは申し訳なさそうな感じで言った。

「ううん。ちーならきつとこういう形で来ると思ってた」

「ありがとう」

それからちーは再び、チューナーメトロノーム相手にロングトーンを吹き始めた。2年と半年の間、努力して磨かれ続けてきたちーの音色は、大江中吹奏楽部の中でも秀逸だ。

それでもこうしてロングトーンをサボらない所は、さすがちーだと思う。ロングトーンはただ音を伸ばすだけの練習で、とても大切な練習だけど、あまりの単純さに退屈に感じる事が多い練習だ。

でも、“上手になりたい”というれっきとした意志をちーは持っている。だから……こうした努力ができて、それが結実する。

わたしがアルトサックスを出し終えた時、ちょうどちーのロングトーンも終わった。

譜面台を立てて、わたしがアルトサックスをぶら下げてちーの横に並ぶと、突然ちーがこんな事を呟いた。

「……あたしってまだ子供なんだろうな」

本気

「コンクールの時、トロンボーンが分裂しちゃった時も、あたしが怒ったのが発端だったし」

わたしはその日のちーの様子を今でも鮮明に思い出す事ができる。無表情、でもどこか寄せ付けないようなオーラ……普段のちーからは想像もつかないような感じだった。

「あたし、一生懸命やってるつもりなんだ。でも最近、それが自分勝手みたいな気もしてきた」

ちーは、吸い込まれるような目をわたしに向けてきた。

「あたしの本気って、他のみんなからすると、きっとウザいだけなんだろうね」

わたしは、ちーの仕切り方をウザいなんて、これっぽっちも思っ
てなかった。思う方が不思議だった。

でも、昨日の三谷さんの態度を見る限り、よっぽど気に障ったんだろう。感じ方は人それぞれだけど、3年生でアンサンブルコンテストに残るといふ事はちー位の覚悟は持ってやって行かないといけないのだろうか。

「わたしは全然思っていないよ。逆にちーの教え方、わたしは好き」

「……ホント？」

「うん」

わたしは笑顔をちーに送った。ちーはよかった、と言って再び斜めに視線を向けた。

「三谷さん、明日来るといいよね」

「うん……一応、2年生よりは上手いしね」

わたしたちの演奏する曲“夢への冒険”は、パーカッションの移動がとにかく多く、大変な曲である事を知っている。

「よし。この後ちょっと会って話ししてくる。今日はここら辺でいいかな」

そう言っ、ちーは譜面台を畳み始めた。まだ15分も経ってないのに。

「もう終わり？」

「うん。直接会って話してきたいんだ」

「わたしも行っていい？」

わたしのこの質問に、ちーは少し考える素振りを見せた後、

「ううん」

と拒否の意思を伝えた。

「これはあたしの起こした問題。だから、あたし一人で解決したいんだ」

その言葉からは、みなぎる決意がひしひしと伝わってくる。

「うん、頑張つてね。わたしはまだ練習してくよ」

「サンキュー、美穂。美穂こそ無理しないでね」

「もちろん！」

とつくに譜面台を畳み終わったちは、マウスピースを洗いに水道へ向かっていった。

（三谷さん、帰ってきますように）

わたしは心の中でそう祈って、楽器を構えた。

結論

わたしは来ると信じていた。三谷さんの事だから、きっと来るに違いないと思っていた。

……だから、わたしはちーから聞いた三谷さんの言葉が衝撃だった。

「……“今日、部活行けば分かる”って」

――――

朝早くの誰もいない教室で、その事は伝えられた。

「あたしは精一杯引き止めたけど、三谷さんアンコン辞めるって」

「どうして……？」

電気を点けていない薄暗い教室の中、わたしは気持ちがどん底に沈んだ。

「何で辞めるの……」

「それが、もうどうしようもない感じでさ」

ちーは窓の外の校庭を見て、言った。

「……“この位の気持ちでアンコン出ようとするなんて、ダメなんだよきつと”って」

「そんなの、逃げてるだけじゃん！」

口が勝手に動く。抑え切れない心が、わたしを支配する。

「それも言った。それに、みんなもう悪く思ってたんじゃないって言った。でも……そんなきれいな事言わないでって言われた」

そんなはずない！ 星羅の時も、みんな星羅の事なんて責めてないんだから。

「自分を責め過ぎだよ……！」

わたしの言葉が教室に吸収され消えた後、ちーはゆっくりと口を開けた。

「……“それがきれいな事だって事は、今日、部活行けば分かる”って」

どうしてそう言い切れるの！ ……どうして。

そう心は叫んだけれど、空気は震えなかった。

再び訪れた静寂。ちーはわたしの上履きを見るようにして、その静寂の中に一つ一つ言葉を紡いだ。

「……三谷さん、悔しそうに顔してた。まるで、昔のあたしみたいな感じだったんだ。感情を抑えきれなくなった過去への自分への悔

しさというか、なんていうか……」

ちーは絶対に人前では泣かない子だ。けれど、ちーの心は涙を流している。

「何だろう。でも、自分がもうこの場所に戻れない事、しっかりと悟っているのには気が付いた」

「何でそう、自分だけで割り切れるの？」

自分を過小評価しても、何もいい事なんてない。むしろ悪い事ばかりだ。

だから、わたしが一番して欲しくない事なんだ。

……でも、ちーはそれを受け入れた。

「……あたしには、分かる気がした。残念だけど、今日の部活で分かるよ。きっと……」

自分がない方がいいという考え方は、わたしは嫌いだ。でも、それが第三者から見て、必ず間違っているなんて……それこそ、言い切れない。

もう、わたしは何も言えなかった。

損

私は、今日の部活を心配していた。昨日の出来事から立ち直って欲しい。ただ、それだけだった。

だから、三谷さんがアンサンブルを辞退したと聞いた時には、私は複雑な気持ちになった。

いざこざは解消した。他の人もそんなに気に掛けていない。空いた穴も埋め合わせができる。

現実、三谷さんの辞退には何も悪い事は起きていない。それどころか、見事にアンサンブルチームが立ち直ったのだ。けれど……。

私は、過去の私と三谷さんを重ね合わせていた。人の優しさを信じてなかったがゆえに起こった私の事。感情的になりすぎたがゆえに起こった今回の事。

しかし大きな違いがある。私はたくさんの人々に心配してもらえた。でも三谷さんが辞退しても、このチームのほとんどがあまり表情を変えていない。

むしろ、生き生きとしている人もいる。

「じゃ、練習始めるよ」

嶋さんの声が、第2音楽室に散った。

どこことなく、いつもの嶋さんではない気がした。けれど私は、特

に気にすることなくクラリネットを構えた。

――――

……本当に、三谷さんの言った通りになった。もう、三谷さんの入る余地は残されていなかった。

代役として起用された2年生の佐藤さんは、初見にしては大分上手かった。期待するようなコメントが、チューバの海花^{うみか}から出た。

このようになってしまったのは、三谷さんがあんな事を言いつ放しで辞退してしまったからだ。もし今日三谷さんが辞退せずに謝りに来ていたら、きっとまた三谷さんと一緒にアンサンブルできたはず。なのに……。

わたしはまた、人の優しさを信じ切れずに、損をした人間を見てしまった。

損（後書き）

これで、三章完結です。

光

全員で出した最後の音が、第2音に響く。その余韻を聴いた後に、私達は立ち上がり、礼をする。

数時間後、私は一体どんな気持ちで礼をするんだろう。

「着席ー」

嶋さんの声で、その思考が切れた。

「とりあえずOKっしょ」

チューバの中田さんが言う通り、演奏者側から見れば特に大きな問題点はない。うん、このパフォーマンスが本番の時にできれば行ける。

秋分の日今日は、アンコンメンバー校内選抜会の日だ。4チームある内の2チームが、大江中吹奏楽部の看板を背負って地区予選に出場する。

3年生がいるチームは私達だけだけど、もちろん後輩のチームの方が上手かったら容赦なく落とされる。実際、去年はそうだった。

今年は2年生のスキルがかなりハイレベルなため、正直な所通れるか不安だ。特にサックス4重奏は私達にとって脅威であり、他のチームもなかなか上手いので結構怖い。

でも、私は絶対にここを通らないといけない。みんなのためにも。

星羅のためにも。

だから、三谷さんが辞めて佐藤さんが代わりに入った時でも、私は嶋さんの下一切妥協せず練習してきたつもりだ。

嶋さんは、練習スタイルを一切変えていない。きっと、今いるみんながついてきてくれる事を信じているから、強気な練習スタイルを崩さずにできていると思う。

過去にとらわれず自分の意思を貫き通す事の難しさを、私は身を持って知っている。だから、私は嶋さんを尊敬できるんだ。

「じゃ、お昼にしよう」

ふと時計を見ると11時30分だった。選抜会は午後1時30分からだから、早めに食べておかないと本番の時息が上手く入らなくなる。

私はクラリネットのリードを外し、丁寧に水分を拭き取ってから譜面台に置く。そしてマウスピースを取ってから、スワブという紐のついた布をクラリネットの中に通し水分を取る。その間にみんな輪になって床に座り、弁当の準備しているから羨ましいもんだ。

2、3回スワブを通した後、クラリネットを椅子の上に置き、急いでカバンから薄い紫の弁当箱を取り出してみんなの元に向かう。

「ごめん、待たせちゃって」

私は、私のために空けてくれていたのであろう美穂と久保田さんの間の空白に座った。

「うっん、それよりも楽器の方が大切だしね」

「ありがとう、美穂」

「それじゃ、全員準備出来たから……りっくん音頭取って!」

嶋さんが突然久保田さんを名指し。

「えっ!? オレ……?」

驚いて自分の顔を指差す久保田さん。その反応が面白かったから、みんなでクスクス笑った。

ちなみに、久保田さんは女子。なぜこんな喋り方なのかは私は知らないけど……。

「えと……何て言えばいいんですかね?」

「手と手を合わせて、とか?」

中田さんの発言にまたクスリと笑ってしまった。でも……

「じゃ、じゃあ……手と手を合わせて」

提案を鵜呑みにしてそのまま実行に移す久保田さんがとても面白くて、思いつきり笑っちゃった。

私、1ヵ月位前より絶対明るくなってる。それは、やっぱりみんなのお陰なんだ。みんなが笑顔でいてくれるから、私が落ち込んで

いるのがバカみたいに思えてきたんだ。

でも、悲しさを忘れた訳じゃない。ただ、心の奥底にしまっておけるようになっただけなんだ。

「い、いただきます」

「「いただきます！」」

私って幸せだな。こんなにいい仲間と一緒に演奏できるなんて。

危機

連符の後の伸ばしを一気に吹き切り、俺はその余韻を聴いてから楽器を口から外した。そして、真正面の薄汚い黒板に向かって礼をした。

……これじゃダメだ。間違いなく落ちる。

「座って」

そう号令したテナーの根本も、危機感を持っているようだった。

「……まずいよこれじゃ。全体的に連符が揃ってなくて訳分からない」

確か昨日は普通に出来ていた事だ。なのに、これって……。

他の奴も、浮かない表情だ。

「本当はこんなはずじゃないんです!」

そう言ったのは、俺の隣に座るアルトの倉島。1年にしてはなかなかの技量を持っている。が、この合わせではかなりミスしていた。

「本番の事を思い描くと、どうしても緊張してしまつて……」

倉島はうつむいた。表情は見えなかったが、泣きそうである事を察した。

「……大丈夫だって。今は本番じゃないし」

根本が優しく慰めたが、返事は返ってこなかった。下手に俺が動くと状況を悪化させかねないため、俺は傍観する。

俺達が奏^やる曲は“異教徒の踊り”。普段はアルトを吹いている俺だが、この曲ではソプラノを吹いている。

俺がソプラノに慣れるのに不思議と時間は掛からなかった。ただ非常に細かいパッセージで案の定苦戦し、3日前になってようやく聴けるようになってきた。

横山先輩から「サックス怖いよ」って言われているけど、実際はそんなもんじゃないと思う。俺がダメと思ったら、どんな奴が認めようがダメなんだ。

俺が納得できるような演奏が、俺はしたい。今の合わせは、まだその境地に全然達してない。

バリトンサックスを持っている1年の東海林^{しやうへい}も俺と同じ考えだろう。めったにしゃべらない奴だが、人一倍音楽に関してストイックであり、妥協を絶対に許さない。

「じゃ、昼にしよう。食べ終わったらすぐ、練習しよう」

根本は明るい声を作りそう提案した。1年の2人は浮かない表情で楽器を椅子に置き、弁当をもう大分傷がある学校机の上に置いた。

一体どうすればいいんだよ。ここで終わる訳には行かないのに……

……！！

俺はわざと音を立てて息を吸い、ソプラノを一瞬だけ力任せに鳴らした。

当然ながら、とても乱雑な音だった。

選抜会

後輩達が音楽室の会場準備をし終わり、私達は学校の椅子が並べられただけの観客席兼待機席に黒の楽譜ファイルとシャーペンを持って座った。

いよいよ、アンサンブルコンテスト校内選抜会が行われる。今はまだおしゃべりの声が場の音を独占しているけど、5分も経たない内にここは無音空間となり、演奏者の緊張をあおるようになる。

アンサンブルコンテストでは1校につき2チームまで参加できる。この校内選抜会に参加しているチームは4チーム。よって、選ばれるチームの数は2分の1。

倍率は低いようで高い。

私達は直前の合わせでもそれといったミスもなくほぼ万全の調子だ。だけど、本番は何が起るかわからない。万全だからといって気を緩める事は当然許される事ではない。

実際、本番で気を緩めるなんて不可能だけど。

そんな事を思っていると、横から長細い紙が4枚回ってきた。

講評カード。“技術”“音色”“アンサンブル”という3つの項目を1～10の10段階で評価し、下に批評？感想などを文章で書き込む。実際のアンコンの審査と同じ内容だ。でも、私達参加者や、1、2年生の書くカードは審査に直接影響するものではない。

けれど、選抜会終了後各チームに渡される。お互いを高め合うのが目的。先輩として適当に書く訳には行かないし、もっとみんなに上手くなって欲しいし……だから、私は厳しく付ける姿勢でいる。

前に8台の椅子と緑色のフロアタムが後輩達によって置かれ、準備は整った。

部長の久保田さんが手を叩くと、おしゃべりの声が徐々に小さくなり、やがて消えた。

一瞬にして、場の空気が様変わりした。

「これから、大江中学校吹奏楽部アンサンブルコンテストを始めます」

その後、宮本先生の言葉と審査員の紹介があった。ちなみに審査員は引退した3年生や、吹奏楽部OG？OBが中心となる計7人。審査委員長は昔ここでチューバを吹いていて、今では大学生ながら楽団での指揮者を任されているという木下達也さんだ。きのした たつやなお、審査員も私達と同じ講評カードを使う。もちろん、こちらは審査結果に影響を及ぼす。

時間はあっという間に過ぎた。まだ話を聞ける余裕はあったけど、それでも時間が経つのが早く感じた。

後輩7人が音楽室か退室した。この子達がプログラムの1番、“テレプシコーレ舞曲”を演奏する木管七重奏のチームだ。この曲は木七としては変則的で、途中ホルンがタムに持ち替えをする。またフルートとピッコロ、オーボエとイングリッシュホルンというように他のパートも持ち替えが多い。

私達はこの次、プログラム2番となっている。前もってくじで順番を決めているので平等なんだ。

音楽室の外からかすかに聞こえてくる、様々な木管の音。きっと今第2音でチューニング中なのだろう。

そして“オー！”という声が廊下に響き、7人の後輩達はそれぞれの楽器を持って音楽室に入ってきた。音楽室に入った瞬間からもう既にコンテストは始まっている。凜とした表情で、それぞれの椅子の前に立った。

真剣そのものな顔。本気でアンコンを狙って来ているからこそ、こんな表情を見せているのだ。

私はファイルを下敷き代わりに膝に置き、その上に講評カードを乗せシャーペンを持った。

「それでは、演奏の方に移ります。プログラム1番、木管七重奏。“テレプシコーレ舞曲集”です」

久保田さんがそう言うと、木七のメンバーは揃ってお辞儀をした。すると期待の意を込めた拍手が響く。

それがふと消えた瞬間、場の空気は最も緊張する。それは第一音を発するまで続く。

お互いの顔を見合わせ、フルートの子が構えると、全員が一斉に構えた。

一呼吸おき、フルートの子が合図を送った。

柔らかい素朴なハーモニーが音楽室を包み込み始めた。

選抜会（後書き）

ここでのいう『実際のアンコンでの審査』とは、埼玉県予選での審査方法であり、全国大会及びその他の地区大会とは審査方法が異なります。

緊張

最後の伸ばしの音のクレッシェンド。管楽器と弦バスが一体のハイモニーとなり、それにフロアタムが味付けをしてよりクレッシェンドを引き立てる。自信溢れる音だった。

防音になっている音楽室では音はほとんど響かない。それでも、演奏し終わっても少しの間は楽器は下がらなかった。ホールの中での本番を意識しているためだろう。

そして一斉に楽器を下げた起立し、礼をする。私達は演奏を称え拍手を送る。

もう次なのか。

評価を書くため聴くのに集中していた私は、無音空間となった今気付いた。

すると、体の奥で何かが怖がって震え出した。その振動はじわりじわりと私を追い込んで、緊張となって襲ってくる。

“批評・感想など”の欄を書き終わる時、わずかに文字が歪んだ。

いつまでもここに居る訳には行かないので、私はわずかに震える足を動かし音楽室から出る。

なんだかんだ言って、私はアンサンブルをやるのは今年が初めて有志でアンコンチームを結成する形なので、自分の技量が今ひとつだった過去の私は一度も参加しなかったのだ。

だけでも今年は違う。星羅への贈り物として……つたないかも知れないけれど、思いを込めた演奏をしたいから。

なのにこんな所で緊張してどうする。

だけど、余計な意識を飛ばすのは難しい。大切なのは気の持ちようなんだろうけど、上手い方向に気は向かないものなんだ。

第2音は、緊張と安堵が混ざり合った空間になっている。既に終わって緊張から解放された木七のチームが軽く会話をしながら楽器を置く中、緊張に束縛されている私達は無言で楽器を手に取り、入念に音質のチェックやチューニングをする。

「大体出来た？」

嶋さんの言葉に、声を発する事なくうなづく。私は固い。

「いつものように、あたし達の演奏をすればいいだけだよ。簡単でしょ？」

ただ、嶋さんは柔らかかった。

“いつも”って何なのかさえ分からなくなっている私には、その言葉なんて何の意味もない。そう、その位緊張してしまっているのだ。

でも、その緊張さえほぐしてくれるのは柔らかい声色だったり、柔らかい笑顔だったり。

不思議と体の奥の震えが収まってきた。

そして、“いつも”を理解出来るようになるまでに震えが収まった時、怖がっていた何かは平常に戻って行き、振動も小さくなっていった。

自信持って、今の自分が出来る演奏をしよう。

私達は楽器を持って、ゆっくりと会場の第1音楽室に向かった。

一番前を歩くトランペットの久保田さんがドアを開けた時、私達の選抜会が始まった。

花

上手い演奏というのは、曲の出だしの音で衝撃が走る。何度か過去体験した事だ。

空気の音しか聞こえない静寂の中、佐藤のビブラフォンが和音を響かせ、山本先輩のクラリネットが空気を心地よく震わせる。そして草野のフルートが追っかけるようにして入り、やがて横山先輩のアルトが主旋律となって流れていく。

それはまさに、澄み渡った小川が流れるように美しく。

俺は評価カード抜きで聴いていたかった。この、綺麗な旋律の響きを浴びていたかった。

ただそういう訳にもいかないので、小さな欠点を耳を立てて探る。

でも、間違いなくアンコン行きだろう。音色、歌い方が素晴らしく聴こえるのは先輩達のオーラのせいかな。

いや、そうじゃない。2年半努力を積み上げてきた結晶だろう。

佐藤が手に持つスティックから生み出されては消えていく、コンガの軽快なリズム。それに乗っかって響く、金管のちょっとした不思議なファンファーレ。場面が切り替わり、テンポが早くなる。

リズムが3連符中心に変わってもなお、演奏は崩れずに安定していた。

むしろ、音色に光が兆した気がした。明るくてもどこか不思議な曲調は、より一層俺をこの世界に引き入れていった。

そして最初のメロディーの変奏が、スピードはそのままに4分の4で歌われる。さ最初の流れるような旋律と、中盤の明るい音色。それが一体となって心を震わせる。

再び不思議なファンファーレが、木管も含めて全員で吹かれる。全員の音は1つの大輪の花のように広がり、音楽室全体を包み込んだ。

一瞬訪れる休み。フルートが3つ音を奏でると、全員で上昇音符が吹かれた。

大輪の花は美しく散り跡形もなく消え去った。その時の静寂さえも、美しく感じた。

この境地に達したい。

俺は対抗心を静かに燃やした。このような演奏を……！

ライバル

先輩達の混合八重奏の後は、金管五重奏の発表だった。曲は、“文明開化の鐘”。

しかし、散々な演奏だった。トランペットが最初の音を外してしまったのをきっかけに、今までの練習という基盤がまさに音を立てながら崩れていつてしまった。

練習の時に時々聴こえる金管の重厚で輝かしい響きは、俺達に焦りの種を植え付けるのに十分すぎた。

そうであつても、本番に失敗する事は大いにあり得る事だ。いや、むしろ本番だから失敗しやすいのかも知れない。

この演奏の次、つまりラストに演奏する俺達。一番最初の木7でも危機感を感じたが、この金5の崩壊を目の当たりにした事によって余計に不安を駆り立てた。

最後の重音が響き、彼女達の演奏が終わる。礼をして退場すると同時に、俺とその他3人……サククス四重奏のチームは音楽室から退出していった。

第2音に入った、彼女達の悔しさがはっきりと表れた。

静かな、でも無念さがにじみ出るような泣き声。虚しく響き渡った。

ただ、俺達に同情したりする余裕なんてない。俺達は俺達、彼女

達は彼女達。普段はチームだが、今日はライバル。

俺は聞いて聞かないふりをし、机に置いてあるまだ真新しいソプラノサックスを首に掛け、リードの調整をする。そしてベルにチューナーマイクを挟み、一音一音慎重に、かつ迅速にチューニングする。

他の仲間も同じようにチューニングをしている。集中するのは各々の音のみであって、他には何もない。

あらかたの音を合わせ終わると、根本は手を叩いてサックスの音を止めた。

忘れかけていた泣き声が再び聞こえる。が、もうそんなものに気を取られる事はない。

「全員で1回B 出して」

「はい」

“せーの”の掛け声の後、同時に響く伸ばしの音。俺の耳で聞く限り、音のうねりはなかったので音程の狂いはないだろう。他にも音を合わせたが、特別ズレが発生していなかった。

だが、どうも心細い。気持ち音が音に出てしまっているのだろうか。少なくとも俺の音だけではない事は分かっていた。

「……ありさちゃん？」

根本が倉島の異変に気付く。倉島の頬には、涙の線が伝っていた。

無言で頷く倉島。それは、“大丈夫”と言っているようで。根本に向けての意志表示かも知れないし、自分に言い聞かせているのかも知れない。

ただ、倉島が嘘をついている事は明白だった。

「平気だって。今まで、私達沢山練習してきたでしょ？」

根本は優しく語りかける。倉島は再び小さく頷く。

「私達にはその貯金がある。他のどんなチームよりもその貯金は大きいはずなんだ。だから絶対、成功する。アンコンにも行ける」

2人の様子を見ながら、俺はふと練習の日々を思い出す。多少強引な根本の練習に若干イラつく時もあった。しかし、その強引な練習が、俺達の限界を高めてくれたのかも知れない。

「さあ。みんな、行くよ」

根本の呼びかけによって、俺達は音楽室に向かった。

倉島の顔は、弱々しいものから凛々しく真剣な表情に変わっていた。

四重奏

「プログラム4番、サキソフォン四重奏。“異教徒の踊り”です」
その声を聞いてから、俺は前を向いて礼をする。拍手が聞こえたが、その後はもう空気の音しか流れなくなる。

俺達は静かに着席し、俺はチームの3人を見渡す。倉島は緊張した面持ちだったが、俺と目が合うと心なしか表情が緩んだ。

さてと、やってやろうか。

俺はソプラノサックスを構える。それと同時に、他のメンバーも構える。

そして、息を吸った。

最初は滑らかな旋律でスタートするこの曲。主旋律の俺とそのハモリの倉島。伴奏を作る根本と東海林。2つのグループに分け、歌い方を統一させるための練習をした。

多分、ここは上手く行っているはずだ。しかし問題はここからだ。

装飾音が特徴的な同じ動きが始まり、それが高音に移り変わっていく。そして、全員で同じ動きを吹く事をきっかけにテンポが上がる。

練習の時全く合わなかった連符が存在する所に差し掛かった。

前奏と呼ぶべき部分が終わり、メロディ部分に入る。俺は倉島と根本の指に集中する。

連符部分。ソプラノ、アルト、テナーが同じ旋律を吹き、バリトンが打ち込む。上手くできたかどうかなんて分からない。ただ、グチャグチャにはならず済んだ。

高速でタンギングする所も、最後のトゥッティも酷いものではなかった。再び曲はゆっくりになるが、冒頭部分とは全く違う雰囲気。のメロディだ。

実質ここはアルトのソロ。俺は主に効果音担当。他の2人は伴奏担当。この部分は倉島にかかっている。

本番前緊張していたくせに倉島はやりやがった。どこかもの寂しい旋律を見事に表現し、演奏している俺さえも引き込まれそうになった。

言い方を変えれば、俺にも他パートの曲調を聴いてそれに合わせる余裕が出てきた、ということだ。

東海林がトリルっぽい16分を強烈に入った直後、3人の上昇音符がバツチリはまる。テンポも上がり、場面が変わった事を知らせる。

再現部分。またしても連符ゾーンに突入するが、もう臆さない。決まったと確信する。

高速タンギング部分も決まる。ただ、実は一番最後が最も問題だったりする。

連符の連続。ソプラノから下の楽器に移り変わる降下音符が2回。そして、全員で同じ動きの上昇音符。さすがにここはごまかしてしまった。

ただ、最後の短い伸ばしはきっちり頭を揃え、ハーモニーを響かせる。

音が止む。

俺達は前を向き、礼をした。響く拍手に、思わず口角が上がってしまった。

完璧ではない。しかし、不思議と満足だ。

よく分からないが、楽しかったと思った。

自信

サックスの4人がことなく誇らしげというか満足げというか、そんな様子で静かに退場していく。

私は少しの焦りを感じていた。果たして、私達はこの中からアンコンに行けるのだろうか。

木7、サックスはかなりの上手さだった。それを私達が超えているかどうか。

金5は……。

金5で固まっている座席の方を見ると、静かに泣いている。悔しいから泣けている。

私から彼女達に声をかけるのははばかれた。

「全ての組の演奏が終了しました。これから、審査結果の集計をします。しばらくお待ちください」

サックスのメンバーが音楽室を退室した後、久保田さんが言った。顔や声には一切出していないけど、きっと久保田さんも不安なんだろう。

審査結果の集計中は、会場はうるさくなる。お喋りの時間の到来だ。

アンサンブルに参加しなかった子達は単なる暇潰し、私達は緊張

と不安の入り混じった複雑な気持ちを何とか紛らわすための。

また、この時間に評価カードも回収される事になっていた。隣から回ってくる評価カードを、こちらに回ってきた現副部長さんに渡す。

その子は金5のメンバーだった。本人は泣きたい気分だと思う。それでも健気に仕事をする彼女が、どこか悲しく思え、また私達が緊張している事が悪く思えてきた。

「紫音」

隣的美穂が、私に話しかけてきた。いつも通りの表情だった。

「ん？」

「紫音、行けると思う？ アンコン」

「良く、分かんない」

「そう？ でもわたしは、きっと行けると思うよ」

美穂は、少し微笑んで言った。私は今物凄い緊張しているのに、いつも通りにいられる美穂がうらやましかった。

「何で？」

「演奏した後、みんなやりきったっていう表情をしてたし、聴いたみんなも自然に笑顔になってた」

「そうなの？」

その時の私は、自分の事でいっぱいだった。観客を見渡せる余裕なんてなかったし、そもそも私がどんな表情をしていたのかさえもおぼろげで、あまり思い出せない。

「うん。だから私達、自分も人も幸せにできるような、いい演奏が出来たって事。自信、持っていいよ。きつと」

「ホント……？」

私ったら、何回聞き返しているんだろう。

「うん」

返ってくる言葉は、肯定を意味するものだけなのに。

そんな私に気づいた私は、ついクスツと笑って美穂にちよつと変に思われたり。

音楽室のドアが不意に開くと、一瞬にして喋り声が止み、忘れかけていた緊張が押し寄せるようにやって来た。ふと時計を見ると、最後のサックス四重奏の演奏終了から約30分位経っていた。

審査員の先輩達や3年生が音楽室に入ってきて来て、私達の前に立った。一番最後に入って来た宮本先生は、やや端っこの位置、司会者の立ち位置に移動し、私達の方を向いた。

いよいよ、運命の時が来たのだ。

「審査結果が出たので、発表したいと思います」

僅差

電気の点いていない薄暗い第2音で、他の中学から借りたというソプラノサクスを黙って片付ける。

……もう、俺が手にする事は無いだろう。

先輩達混合八重奏のチームは、無事アンサンブルコンテストへの出場権を得る事が出来た。

でも、俺らは行けなかった。僅差で、木7に負けた。

本番の演奏は、今までで俺らが一番良かったと胸を張って言えるような演奏だった。

力は出しきった。ただ、それがわずかに及ばなかっただけ。

そう、わずかに……。

他の3人も泣いていたり、あるいはただ片付けているだけであったり。表情は暗い。

根本がケースを閉じた。

「みんな、お疲れさん。これからサククス、頑張って行こ！」

俺達は黙って頷いた。根本はそれを見ずに、ケースを持って部室

に行った。

第2音から出ていく間に、手を目の辺りに当てるのが見えた。

「……泣きたい時には素直に泣けばいいのにな」

思わずそうつぶやく。すると、あまり口を開かない東海林がこう言った。

「先輩もそうですよ。泣いたって、誰も笑いやしませんよ」

その、声変わり途中の声は震えていた。東海林は顔を紅潮させて泣いていた。東海林がここまで感情を露にしたのは初めての事だ。

「そうです。無理なんてしないで……」

倉島が続ける。もちろん倉島も泣いている。

ただ、俺は。

「無理なんてしてない。ただ、泣けないだけ」

必死でやってきた。そのはずだ。

しかし、俺はとても泣くという気分にはならなかった。なぜなんだろう。

だとすると、それは……。

「……お前達ほど、努力出来てなかったのかもな。俺は」

そういう結論に達してしまうのだ。

「そんな事な……」

「ある」

倉島の反論を封じる。だが、

「トモ、自分で自分を決め付けないでよ」

俺をあだ名で呼んでくるコイツが、部室から帰ってくる事は視野に入れてなかった。

「トモだって、悔しいでしょ？ それで十分だって」

正鵠せいこくを射る発言に、俺は心の中を見透かされているような錯覚に陥る。

根本の顔には、乾いた涙の跡が2本。

「悔しいという気持ちがあれば、表に出す出さないは関係ない。そうでしょ？ これから先がまだあるんだから、そこからまた頑張っ
て行けばいいじゃん」

俺は素直に頷く他なかった。

「みんなも、いつまでも落ち込んでいないで。出ようと思ったたら来年も同じメンバーで出れるしさ。とりあえず今は文化祭の練習頑張ろうっ？」

後輩達2人は、小さく頷いた。

新たに気持ちを切り替えて、もう一度始めよう。

そう、思った。

次へ

「合計176点。……これだと銅賞位ね」

私達混合八重奏は、講評カードを読んでいた。今嶋さんが言った合計点は、審査員8人の合計点。1人30点だから、最大240点。176という数字は、8で割ると22となる。大体の審査員が3つの項目に7点か8点を入れた、という計算になる。

「ええと……やっぱり音程か」

チューバの中田さんがつぶやく。私達は多くが先輩、観客は大体が後輩だから批評・感想の所はどうしても良い所中心になってしまっただけ、それでもちゃんと改善すべき点を書いてくれる後輩も少数ながらいいた。

その多くが、音程の悪さを挙げていた。

「もっと音程合わせないとな……」

私が使用しているのは、ヤマハの450。音程が悪く、自分で工夫して合わせなければならぬ。

特に高音部分は難しい。合わせようとすると音にならなくなり、音色を良くしようとすると、チューナーのメーターが高い方に振られてしまう。

ロングトーンで練習しないと……。

「あとは、もうちょっと表情を上手く付けないかね。Fから先、もうノリでやっちゃってるような感じだし……」

嶋さんが言う“Fから先”とは、練習番号Fからの、テンポが早くなり4拍子となる所だ。

「そこは、もっと合わせられるようにしないと」

私は、参考になる事はどんどん楽譜にメモしていった。既に楽譜は、書き込みでやや見づらくなっている。

これが私の努力した証であり、本番に勇気をくれる。コンクールの時もそうだった。

ただ、アンコンの時は楽譜なしでやるつもりだけど……。

「とりあえず、代表に選ばれた事に喜ぼうよ」

そう言った、透き通るような声の持ち主は美穂。みんなが美穂の方を向く。

優しい微笑みを湛^{たた}えていた。

「あと、みんなの前でやってみて色々気付いた事とかあるよね。それを、上手く生かしてってさ、本番頑張ろう?」

3人の後輩達は、はい、と返事した。私は、うん、と笑って頷いた。

「その前に文化祭があるじゃん。もうあと2週間位だよ?」

忘れてた。今の嶋さんの発言で思い出した。

そうだ、アンコンメンバーは文化祭でも演奏するんだった。本番に近い雰囲気で作れる絶好の機会ではあるけど、いかにせん練習期間が……。

けれども、美穂は笑顔を崩さない。

「でも、2週間で人前で発表出来るレベルにまで持っていけば、あと大分楽だよ」

そのポジティブな発言に、思わず

「出来るかな……」

と弱音を漏らしてしまったけど、

「大丈夫だよ。わたし達なら、絶対出来る。だってちーがいるから」

「え、あたし？」

と、突飛に嶋さんに振って私を元氣付けるところか、皆の笑いを誘った。

「先輩、付いていきますから！」

パークス2年生の佐藤さんが、プレッシャーを掛ける。他の皆も視線を嶋さんに凝縮させていて、嶋さんはちょっと困惑してる。

だけど、急に顔が凜々しくなつて。

「……ありがと、皆。あたしが絶対、皆を県大に連れていくから！」
ノリで言つたとしては、どこか頼もしすぎるような口調。飾つて
いる気配は全くない、きつと本気でそう決意したような。

「おおー！」

中田さんが声を上げて、皆で嶋さんに向かって拍手した。

何か、皆にたくさん元気を貰つてる。

星羅、私はここに居させて。

今、とても幸せ。いつものような温かい皆が、私のそばに居てくれるから。

次へ（後書き）

これで、四章は完結となります。

切々

「文化祭、良かったよ」

「ありがとうございます」

日が短くなり、急に冷え込みつつある9月の終わり。文化祭という大きなイベントを終えて、俺は太田先輩の病室にいた。

静かで、ただ白い空間に橙色の光が差し込むが、空気は暖かいとは言えずじわりと体を冷やす。右手でシャーペンをクルクル回す太田先輩の膝に優しく掛かる布団が羨ましい。

俺がここに来た時、太田先輩は上半身を起こし、ベッドに格納されている簡易テーブルに筆記用具と進研ゼミのテキストを置いて、勉強していた所だった。

つくづくさすがだと思う。付せんや色々書き込まれたテキストは既に紙の端が破れかけていて、かなり使い込んでいる事を示している。一年後の俺が同じようになっていいるなんて、全く想像がつかない。

だけど、勉強している最中であっても俺と会話してくれるという事が嬉しかった。

「次は……12月の吹奏楽フェスティバルだよね」

「はい」

「今年も瀬中^{いわた}と一緒にやらせてくれるんだよね。曲は何やるの？」

瀬中の吹部は12人という少人数だけど、今年はBの部の県大会に出たという実力がある。こちらの方が遥かに人数が多いので、瀬中のサウンドを台無しにしそうで若干罪悪感がある。でも、まあいい機会だし。

「“ブルーリッジの伝説”というやつです。スウエアリンジェンの」

「何、それ」

首をコテンと傾げる太田先輩。

「テツテツテレツテツテター、とかいう感じの」

「どっかで聴いた事ある気がするな……今度聴いてみよっと」

「病院の中じゃケータイとか使えませんが」

「あちゃ……」

太田先輩は、自分の頭をシャープンを握った右手で軽くコツンと叩いた。一つひとつの仕草に惹かれて、少しだけ胸が早くなる。

「でも、頑張つてね。足引つ張らないように……あっ」

太田先輩が、シャープンを回そうとしたど手が滑ったようで、俺の目の前に飛んできた。俺は反射的にそれを掴む。

「お、ナイスキャッチ」

太田先輩と、手に持つシャーペンをほんの一瞬だけ、見比べる。

シャーペンに、ほのかな熱を帯びているのを感じる。太陽とかヒーターとかに温められたような感じではないまた別の、先輩の手の温もりだった。

にわかにあの時の事が思い出される。太田先輩から事実を告げられたあの日の事を。

あの時握手した手の温もりと、このシャーペン伝いに伝わる温もりは、似ている。

「おーい」

太田先輩から声を掛けられる。

「あつ……ごめんなさい、ボーツとしてました」

何となく恥ずかしくて、シャーペンを直接手渡すのではなく簡易机の上に置く。目を顔の方に持って行きたい、でもその奥のナースコール用の電話機にピントを合わせてしまう。

気付くと、胸の鼓動は全身に振動しているほど大きくなっていた。顔も、内面から熱くなってきたいて、変な汗が滲み出るのが分かった。

ふふっ、って小さく笑っている辺りもうお見通しなんだろうな、俺の心。

なぜだか分からない。最近になって急に、俺は太田先輩に強く惹かれるようになっていった。一人の時とかになれば太田先輩の顔とか、声とかが脳裏に浮かび、病院に行ける週末が来ると凄くウキウキした気分になる。

でも。やっぱり、恋というやつとかに俺はめっばう弱くて。

太田先輩は確実に俺の気持ちに気付いてる。気付いてるけど、別に嫌な態度とかを取ったりとかしてない。

告白しても嫌な関係になってしまう可能性はかなり低いだろうと予測できている。でも、俺はその一言が伝えられないんだ。

照れ臭くて、恥ずかしくて、何より怖くて。頭の中じゃ分かってるんだ、言えているんだ。でも、喉に何かがつつかえて言えないんだ。

好きです。

たったこれだけなのに、この言葉は恐ろしい程の重さを持っている気がする。

……かと言って、付き合いたくないなんて事な訳ないんだ。

ずっと居たい。

それには……。

俺は今にも胸が張り裂けそうで、苦しい。

亀裂と修復（前書き）

今回、タグには無いですが若干のガールズラブ要素が入ります。
しかし、今後この要素に傾倒する事はありませんし、いつも通りの
真剣な話です。

亀裂と修復

気付けば、アンコンまであと1カ月。ひんやりとした空気が、階段を上るわたしを包みこむ。

いつも通り荷物を持って、ゆっくり一段一段けだるく上っていく。授業の疲れで何となくそうなってしまうのであって、部活が嫌とかそんな風には全然思えない。

ここの階段はあまり使われない。音楽室から一番端にあるので、使うのはその階段の近くにあるわたし達のクラスの一部位。誰もいないし、音も空気のツー……という音と自分の足音だけだから、落ち着けるんだ。

ここを上っている間は、束の間の頭と心の休憩みたいな感じ。休み時間中も色々喋って、楽しいけどなかなか疲れるんだ、テンションが上がるから。

わたしは、わたしの足音だけを耳に入れながらいつも通り一段一段上っていく。

だけど、いつも通りじゃない事がこの後あった。

「私と、その……っ、付き合って下さいっ」

かすかに、しかし不意にはっきりと聞こえてきた女子の声に、一段ずつ上っていつている足の動きをピタリと止める。

ただ、過去にもわたしがここを上っている時に、告白に遭遇した

事が何度かある。ここが滅多に使われない事を利用しているのだろ
う。

その時、わたしは一旦足を止めて、人が立ち去るまでやり過ごし
つつ隠れて聞く。別ルートから行くという手もあるけど、赤の他人
でもやっぱり結果は気になる。

少しの沈黙があつて、わたしの聞き慣れた声が聞こえた。

「……ごめん。オレは女子を好きにはなれない」

他でもない、陸の声。陸は口調が男っぽいだけであつて、見た目
はボーイッシュではあるけど完全に女子。声もやはり女子。

つまり今起こった事を説明すると、とある『女子』生徒が『女子』
である陸に告白したという事になる。

「……分かった。でも、私の想い、聞いてくれてありがとう」

その女子生徒の声が聞こえた後、その場から立ち去る足音が響い
た。

衝撃だった。

わたしが知っている子にもそれっぽい子はいる。でも、わたしは
実際に女子が女子に告白している所を聞いてしまったのだ。

それも、相手は良く知っている陸。

衝撃がまだ脳裏に焼き付いている中、わたしは恐る恐る階段を上

った。もう、落ち着くどころではなかった。

わたしはただ足音が響く階段をゆっくりと上る。3階に着いた時、わたしが3階と4階の間にある踊り場にいた女子と目があつた。その見慣れた顔の女子は、わたしを戸惑いの目で見て来た。

いなくなつたと思つた陸はまだいたのだ。

「……あの、先輩。ひよつとして聞いてました？」

わたしは首を横に振つた。

「そうですか」

その後、音楽室まで2人並んで歩いたけれども、一向に会話は生まれず、気まずい空気だけが流れていた。

その日陸は絶不調と言える程のコンディションで、音を出そうとしても外してしまつたり、指を間違えたり。本人も納得が行かないようでいらだちを見せていた。何かあつたのか、とちーに問われても陸は首を横に振るだけだった。

ひよつとしたら、あの時正直に言つてたら陸の不安を取り除けたかもしれない。

わたしは嘘をついた事を後悔した。

でも、この練習が終わつた後にその事を言う事は出来る。まだ遅

くはない。話すならば、なるべく人がいない所がいい。

わたしは部活終了後、陸をさっきの階段に呼び出した。

「ごめんなさい、今日こんなんで……」

ばつの悪そうな顔をする陸。それを見て、悪いのはわたしなのに
って言いたくなる。

でも、わたしはなるべく柔らかい表情で聞く。

「ううん。それよりも何かあったんでしょ、今日」

陸は、少しうつむいて黙った。そして、ボソリと。

「……やっぱり、聞いてたんですね」

「ごめん。あの時、嘘ついて」

「いえ、とんでもないです」

再び短い沈黙。短いけれど、重い沈黙。わたしが、それを破る。

「でも、今日それで集中できなかったんでしょ？」

「はい」

その後陸は更に深くうつむき、言葉を続ける。

「オレ、この後が怖くて。アイツと上手くやって行けるのかどうか

……」

普段の陸の元気はなく、すっかり頂垂れてしまっている。ただ、素直にこう打ち明けてくれる事には、ほっとしたというか、嬉しかった。

「オレ、アイツの事は決して好きじゃないけれど、嫌いでもないんです。だけど、オレはまるで嫌いであるかのような返事をしてしまった。だから……」

「それは、明日謝ればいい事なんじゃない？」

わたしは陸の言葉を遮って、今日わたし自身が実行した事と同じような事を言った。

過ちを犯しても、早い内にそれを取り返せば大きな問題にはならない。

「その告白して来た女子は、陸の事が好きで告白して来たんでしょ？ 陸も女子だって事を認識して。相当勇気がいるよね。だって、それって普通じゃないから、ひよっとしたら思いっきり嫌われちゃうのかも知れないんだもん」

コクリ、うつむいたままと頷く陸。

「だけどさ、その勇気ってどこから来ると思う？」

陸に問い掛けるけど、少し顔を赤く染めるだけで何も答えない。きっと陸は分かっているだろうけど、そりゃ言いにくい事だし……。わたしは答えを言う事も答えを言わさせる事もせず。

「分かってるならいいよ。だから、多分その女子は今でも陸の事、好きなんだよ。つまり、多少気まずくなくてもその女子が陸を嫌うなんてないよ」

陸はまた、コクリと頷く。

「でも、その女子はもう自分からは絶対話し掛けない。もしかしたら陸が自分の事嫌いかも、って思ってしまったているから」

ふと、陸は顔を上げた。

「だから自分から話し掛けて、関係を元に戻すって事ですね」

「……そう。自信持って」

わたしは陸を強く見つめた。陸はしばらく目をつぶった後、しっかりとした目でわたしを強く見つめ返してきた。

言葉なしでも、陸の決意はしっかりと伝わった。

良く分からないもの

「何か、様子おかしいぞ？」

それが陸の第一声だった。

もう日が落ちつつある帰り道、俺達は二人並んで帰っている。陸は自転車を押し、中学の方で着用を義務化されている白いヘルメットを浅めに被っている。

「……やっぱ、分かる？」

「そりゃ、だってお前分かりやすいし」

「ちよつ、それ言うなって」

俺から言わせると、こんな状況の時なぜこつも平然でいられるかが疑問なんだが。

ただ、陸の言う事は凶星だったりする。

「良く分かんねえんだよな、今日だけなんか不安定なんだよ」

急に今日から表れ始めた不調。授業の時はボーッとしてノートを書き忘れたり、部活の時もやたら運指ミスったりするし。

「でも、いまいち原因が分からねえんだよ。なんて言えばいいかな……とにかく、良く分かんねえんだ」

何かが詰まっているというか、その……何とも言えない何かに支配されているような……。

とにかく言葉では説明しにくい。でも、何かが溜まっている事は何となく自分の感覚で分かる。

俺の曖昧な言葉に対して、陸はこういう推測をぶつけてきた。

「ふーん。それって太田先輩の事じゃなくて？」

「な、何で太田先輩がここで出て来るんだよっ」

まさに直球ど真ん中一直線。ダイレクト過ぎるだろう……。

更に陸はこう付け足す。

「ま、単に気付いてないだけじゃないの？ 特にお前の場合とか」

そうなんだよ。そういう可能性もあるんだよ。

俺は無言で陸の顔から目を逸らした。

俺は、『本物の恋愛感情』なんて知らない。それを理解していないからこそ、こういう風に不安定になってるのではないのか。

しばらくの自問自答。

果たして、これが『本物の恋愛感情』なのだと断定していいのだろうか。

もしそうだとすれば、この後俺が取るべき行動は？

そうで無かったとすれば……いや、そんなはずはない。俺は太田先輩に憧れてるし、思い浮かべただけで胸が高鳴るし……。

俺は太田先輩を好きと言える勇氣はないけれど、そういう自覚ははっきりとある。

「じゃあ、それって……」

本物の、恋愛感情。

俺の中でこの一つの答えが導き出せた時、顔がじわじわと熱くなっていた。

「やっぱりな。オレの予想は的中だった訳よ」

水色と紺が混じり合う微妙なグラデーションの薄暗い空に、陸の得意気な顔が浮かび上がる。

ふと思い反対側を見ると、オレンジ色の夕日は今にも消失しようとしてた。

「そっか……」

だとすれば、俺はこの後……。

「告ったほうが、いいよな……？」

この、目に見えない巨大な欲求を満たすために越えなくてはなら

ない事。

それを越えない限り、俺はその欲求に支配され今日のような不調が続くのだろう。

陸も、ほんの少しだけ考えて、

「ま、そだな。今がその時じゃねえのかな」

と。態度を見る限り、未熟な俺の青い恋を真剣に考えてくれていて嬉しかった。

「お前なら出来るって。男見せてやれよ」

すっかり力強く背中を数発叩かれた。それに籠こもっていた陸の心の力が、俺の勇気になっていく。

俺は一人だけじゃない。

「……頑張るさ」

俺はしっかりと頷いた。

運命の日は土曜日。……絶対に、伝えるんだ。

迷い

大丈夫だ。大丈夫なんだ。俺は……

……本当に大丈夫なの？

気持ちを紛らわそうとして自転車を思いっきり飛ばしている今の状態が。

大して疲れないはずの距離なのに、心臓が踊り息が弾んでいる今の状態が。

空が青く澄んで心地よい秋風が吹く、部活のない日曜日。いつものように俺は太田先輩が入院している病院に向かっていた。

しかし、今日はいつもとはまるで違う気持ちで行く俺がいる。普段は、太田先輩に会って話せるという楽しみな気持ちだけ。でも今日は、緊張と期待と恐怖が入り混じる複雑な気持ち。

俺は太田先輩に告白しに行くんだ。

何とも言えない、このもわもわとした恋愛感情に決着をつけるために。

『男見せてやれよ』

陸が言ってた言葉を思い出す。俺の事をからかいつつ、実は俺を応援してくれている陸。それを知ったのは今週の月曜日の、この言

葉を聞いた時だった。その日に陸は女子から告白を受けていたと聞いた時には、大分驚いたな。

でもその後も陸は、その女子とうまくやっていけている。それどころか以前よりも仲が良くなり、恋人未満ではあるが友達以上の関係を作れたという。

そう、俺は平気だ。失うものは何もない。俺はギアを重くし、ペダルを漕ぐ足に力を入れて踏み込んだ。

そうすると病院までの道程はいつもより幾分か短く感じた。その代わり、いつもよりも息が上がり、額から汗がどつと出ている。

ふと自分を確かめると、思ったより自分が緊張してない事に気がついた。きっと自転車を進めさせるのに夢中でいたのだろう。

だけどその余裕も、自動ドアから病院独特の二オイが放出された瞬間に無くなった。緊張、不安、一種の恐怖。それが俺の心を満たし、ひっ迫させる。

そんな中でも俺はまるで機械のように受付で要件を伝え、太田先輩の病室へのルートを辿る。その時の経過する時間はあつという間で、病室のドアを目の当たりにした時、自分の心臓はとても早いスピードで鼓動を打っていた。

このドアを開ければ、いつもの太田先輩がいる。

俺は大丈夫だ。素直に自分の気持ちを伝えられる人間なんだ。絶対と言えるんだ。

俺は、太田先輩の事が、好きなんだから。

俺はドアの取っ手に手を伸ばそうする。でも何かが邪魔をして、取っ手に触れる事が出来ない。それは、自分の目に一切姿を現さず、隠れて俺の腕を掴んでいるような。

その時俺は悟った。勇気ある自分がいる一方で、臆病な自分もいるんだ。そしてその臆病な自分の方が、勇気ある自分を押さえ込んでいる。

ここに来るまでは勇気ある自分の方がずっと強かった。でも、なぜなのか取っ手に触れようとすると急に勇気が萎み臆病が膨らむんだ。

落ち着こう、落ち着こう。自分にそう言い聞かせ、胸のあたりに緊張で汗ばんだ手を当てる。深呼吸をすると、胸の鼓動が更に自分の手のひらに伝わって来る。

失うものは何もないんだ。俺は平気なんだ。ただ、「好きである事」と「付き合ってもらふ事」の2つを伝えればいいだけなんだ。

たったそれだけなのに……心が壊れそうだ。苦しい。

それは自分への情けなさか、逃げたいという弱さが抑え込まれているからなのか。それとも、今まで太田先輩への想いを抑え込んでいたバリアが破れそうだからなのだろうか。

服の胸の辺りをぐっと掴む。そして目を閉じれば浮かんで来る、太田先輩の顔。

笑顔な太田先輩も沢山いた。でも、少なからずいるどこか悲しげな太田先輩の顔もいた。その、過去を物語るかのような憂いを帯びた顔は、辺り一面いっぱい咲いている花の中でただ一輪萎れている花のような、強烈な印象を俺に植え付けた。

もう、先輩のこんな顔は二度と見たくない。俺が太田先輩の笑顔を作ってやるんだ！

俺はもつと、太田先輩の味方になる。

俺は胸を掴んでいた右の手を離し、小さく強く握り拳を作った。そして俺は意を決して、ノックをした。

「太田先輩、失礼します」

告白

「太田先輩、失礼します」

扉をノックする音と男の子の声を聞き、私はシャーペンを持つ手を止めて白いスライド式の扉を見た。いいよ、と私が言っているとドアがそつと開き、よくこっちに来てくれてて見慣れている男の子……長谷川くんがこちらにトテトテと歩いて来た。

心なしか、いつもと雰囲気が違う。どこか緊張して体は縮こまっているようだけど、目は確かで真っ直ぐに私を見つめてくるよう。

「こんにちは」

私を見つめたまま、長谷川くんは挨拶した。やっぱりいつもと違う。長谷川くんの中で何かが変わってるんだ、きつと。

「こんにちは」

私は少し動揺していた。けれどもなるべくその動揺が長谷川くんに気付かれないように取り繕って、いつものように挨拶を返す。

するとどうしてか、急に長谷川くんの目が弱々しくなつて私の目から逸れた。変なのと思ったのも束の間、すぐにある予測を思い付き、私の頭を覆い尽くした。

ひよつとすると……！

少しうつむいた長谷川くんの顔が、段々と赤みを増してくるのが分かる。体はせわしなく揺れて、落ち着きがない。

どうしよう。何て答えよう。私にはすぐに答えを出せない！

どうしたの？ というたった一言も発する事が出来ず、私はただ無言で焦っていた。そのせいで私達の間にも生まれた無音は、長谷川くんにとってきつと怖かったと思う。

けれど何も私は言えなかった。うつん、全然言える状態じゃなかったと言った方が正しいと思う。顔にあまり感情が表れないお陰で、長谷川くんには私の焦りは伝わらないのがちよつとしたクッションとなる。

一体どれくらい経ったのだろう。とにかく私には長く感じられた時間だった。

長谷川くんは何かを決意したように顔を上げた。顔は真っ赤だけでも、その瞳は長谷川くんが入室した時以上に私をはつきりと見ている。

それから長谷川くんの口が動くのに時間は掛からなかった。

「俺、太田先輩の事、好きです」

予想はしていたけど、実際に長谷川くんの声でその言葉が耳に伝わった瞬間心臓がドキッ、と一つ跳ねた。

さらに長谷川くんは真っ直ぐ強く私を見つめたままこう続けた。

「だから、俺と付き合って下さい」

私の鼓動が段々と早くなっていくのをはつきりと感じた。目を逸らそうとしても逸らす事はできない。長谷川くんの目は私をしつかりと捉えていて、逃げる事さえも許さないような気がした。

どうしよう。こんな時、一体どう返せば……。ああ、前もってちーどりに聞いておけば良かった。

私の頭の中でぐるぐる回る感情。その感情は今までの長谷川くんとこの記憶を探し回っていた。

ふと、感情が何かを探し当てる。それはかすかに覚える、夏休みの時握った長谷川くんの手の感触……。

私の手より大きくて、とても温かい長谷川くんの手。その時の長谷川くんは私にされるがままに握手をして、ちょっと手がぶるぶると震えていた。

さらに、この日の記憶の深くに感情は入り込む。

『あまり一人で抱え込まないようにしてくださいね。みんな、先輩の味方ですから』

長谷川くんが私に言ってくれた言葉。素直にとっても嬉しかったん

だ。

そんな可愛くて、とても優しい長谷川くんを私は……。

ふと、私の目を逃がさずに捉え続けていた長谷川くんの目が急に泳ぎ始めた。そしてなんだかモジモジし始めた。

「先輩……ダメ、ですか？」

かすれそうな小声で自信なさげに長谷川くんは言った。心なしか、かなり赤かった顔にさらに赤みがほんのり増している。

私も知らなかった、私の胸の内の内のまた内側に秘めていた想い。

私はそれに今、気付いた。

スツと、私は長谷川くんの前に右手を差し伸べる。まるで、あの夏休みの時のように。

「えっ……？」

戸惑う長谷川くん。私も私で、顔がじんわりと熱を帯びてきている。そして高鳴る鼓動を一つ一つ感じながら、私は言った。

「うん。私も、長谷川くんの事好きだったみたい」

私は一つ、呼吸を置いた。この言葉がはっきりと、長谷川くんの耳に届くように。

「付き合おう?」

しばらく無音が続いた。けれどもさっきのような無音とは違う、また別な無音である事だと私は感じた。

長谷川くんは私の手をじっと見た。そしてゆっくりと、何だか照れ臭そうに私の手を握った。その、優しく温かく包んでくれる大きな手で。

ふと、長谷川くんが真っ赤に染まった顔を上げた。私と長谷川くんの目が合う。

私がじーっと見つめると、長谷川くんもじーっと見つめ返す。それが何だかおかしくって、二人で同時に声を抑えて笑った。

何か……楽しいな。この2人だけの空間と時間がずっと続けばいいのに、なんて思った私がここにはいた。

決心

欣喜雀躍^{きんきやくやく}。小躍りして嬉しがるという意味の四字熟語なのだが、今の俺の心境を表すのにこれ程適当な言葉はない。

俺の部屋で、ベッドに寝転び少し薄汚れた白い天井を見上げてポーツとしている俺。体こそ静かだが、心はところ狭しと跳ね回っている。

まるで夢のようだ。最近が悪夢続きだったが、今日は良い夢を久しぶりに見た。

窓から差し込んでくる橙色の日射しがようよう眩しくなってきた。俺は上半身だけ起こし、緑の遮光カーテンを閉めて再びベッドに体を沈める。心を鎮めようとするが、なかなか鎮まないどころかますます膨らんできている。鎮めようとすればするほど、それに反発するように膨らんでどうにも抑え切れない。

俺が……太田先輩と付き合う事になるなんて。

自分から告ったクセして、未だに信じられない。

何となく目を閉じる。目を閉じたからといって寝れるという訳ではない。ただ、自分の心をどうにかして落ち着かせたかったのだ。

真っ黒ではない。赤と青と緑が複雑に入り乱れたような。瞼^{まぶた}によって塗りつぶされた世界を凝視すると、それは忙しく動き回るとも細かい粒によって構成されているような気がする。更にそのよく分からない色の海を、無色透明な粒が上に下にゆらゆらと泳ぎ回

る。

ただそれだけで、何の変哲もない目を閉じた時の景色だった。その世界に身を投じたいが、どうも目に見えない何かが拒絶しているようだった。

机上から聞こえてきた、ダースベイダーのテーマ。その発音源は俺のケータイからだ。俺は無視しようかとも思ったが、そうすると更に面倒事になるのは目に見えていたので気だるく上半身を起こし、渋々ケータイを手を取った。

『もしもし』

「もしもし、姉ちゃん？」

『どもども』

俺の姉だ。今は神奈川のどっかの大学に通っているらしい。高校の途中から一人暮らしを始めた辺り、凄い。

「何だよそれ。というか用件なら早く伝えろ」

大抵重要な事ではないので、出来ればさっさと終わらせたいが……

『何、その言い方。情報交換するの情報交換！』

ここで姉が言う『情報交換』とは、簡単に言つと日常の事の雑談だ。俺からすると単なる時間の無駄にしかないので、

「そんなんでも良いだろ」

しかし姉の怖い所はここにある。

『姉弟たるもの、情報の疎通は大切な事でしょ？ もし勝手に切ったりしたら……』

「分かったって。話に付き合えば良いんだろ」

一回姉からの電話を無視した事があるが、その後メールが24通連続で届いて身体中が震え上がった。このような制裁を普通にやつのけるような姉であるので、俺は洪々ケータイを取り、話に付き合ってやらねばならないのだ。

『物分かりがいいじゃない！ じゃ、まず私からね』

適当に聞き流していたので、何を話してたのかは記憶の欠片もない。けれども、大体はサークルの話や、バイト先での話、大学の友人の話が多い。今回もその類の話であろう。

ただ、これで俺の貴重な時間の内の20〜30分は潰される。

『次はあんたの番。そうね、まずは……アンコンの選考どうだった？』

「僅差で負けた」

俺は、基本的には姉からの質問に答えるだけ。というか、質問されない俺は何も話す事がない。

『ふうん。サックス4重奏だったんでしょ?』

「うん」

『ま、ドンマイだね。来年はどうするの?』

「来年はやっぱり受験だし、多分出る事はねえな」

『そうだよなー。高校はどこ行くつもり? 漠然でいいからさ』

「うーん……北高か、できたらそれよりも上の所」

『となると川高とか、東高とか?』

「そこら辺だね、きっと」

質問に答えるだけなのだが、それが結構矢継ぎ早で疲れる。しかも、その質問から姉の話に発展する事もしばしばある。そういう時は決まって、通話時間が1時間をゆうに越えている。

質問を受けては答え、また受けては答え。一体何回繰り返したんだろう。

『あ。そろそろ止めとく? もう大分話し込んだね』

俺がこの台詞をどれだけ待ち望んでいた事か。耳からケータイを離して液晶を見ると、通話時間が45分を突破していた。まだ時間の損失はましな方だ。

「うん」

『最後に気付いた事言ってい？』

まだあるのかよ……。その台詞を口に出してみても良かったのだが、もうそんな気力は残っているはずもなく。

「何？」

俺がかつたるく返事をする、姉は言った。

『あんたさ、誰にプロポーズして上手く行ったんでしょー？』

ど真ん中。どストレート。どストライク。最後の最後でまさかの爆弾。幸い電話だから、今の俺の顔を向こう側に悟られないのが救いだっただ。

というかなぜいきなり！？

俺は沈黙という行動を取った。が、姉は妙な間が開いたのにもかかわらず続ける。

『そうでしょー。だって友樹が電話に出た時、声がなんか興奮してたように高かったんだよ』

それは……！

「マ、マジで言ってるの？」

何とか反撃するが、

『マジ』

あっけなく即答で返される。

『で、相手は誰なの？ やっぱり舞ちゃん？』

もうダメだ完全にお見通しされてる。どうせ何とか取り繕おうとしてもすぐ見破られるのは分かってるし、そもそもそんな気力ないし、かと言って電話切断するとメールが山のように届いて事後処理が面倒だし……。

だから俺は。

「……正解」

こうするしか無かった。

『へえー、まさか友樹に先越されるなんてねー……』

姉が感嘆した感じで言う。俺の聞いた範疇では姉は彼氏を一回も持った事がない。まだ彼氏持つてなかったのか、と気になったが、それを尋ねるとまた姉の話で10分は延長される予感がしたのでどうでもいい話題として捨てた。

そして姉は続ける。

『もうこれ以上、舞ちゃんを泣かせるんじゃないぞ』

強い口調だけど優しい、それでもってなんか温かい。

そんな声を聞いた時、俺は決まって姉が少し好きになる。

俺はハッキリと言ってやった。

「もちろん」

決心（後書き）

五章完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4856v/>

夜空への贈り物

2011年11月18日04時42分発行